

# 東京国立文化財研究所要覧

1 9 7 5

昭和 50 年 度

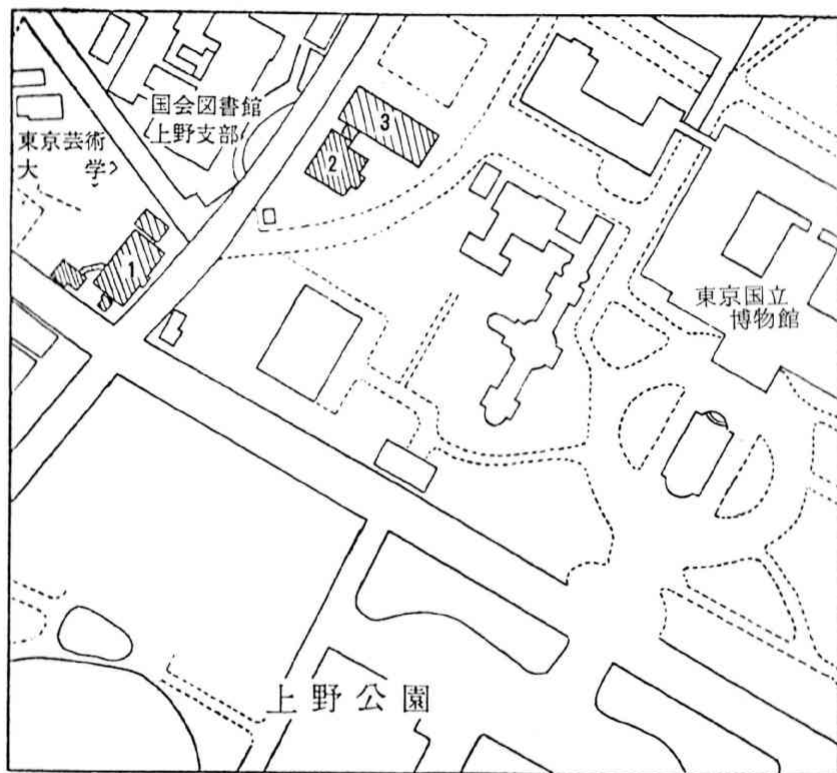


東京国立文化財研究所本館



東京国立文化財研究所別館

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎

## は　じ　め　に

昭和50年度を顧みて、まず保存科学部長の登石健三博士が4月に定年退職されたことと、美術部資料室の永雄ミエ研究員が5月に長逝されたことが心に残った。登石博士は物理研究室の創始者で、ガンマ線ラジオグラフィを文化財に応用する道を開き、ゲルによる密蔵空間内の湿度の自動調節を開発したり、またコンクリート造室内空気のアルカリ汚染について注意を喚起するなどの業績があった。また永雄研究員は司書役を担当し、長年に亘って美術関係の図書文献の整理保管検索に献身されて、所内外の信望を集めていた。美術史研究資料の一層の流通に関し要請のある今日、その死は惜まれてならない。

しかし、一方で文部省研究成果刊行費による「金字塔曼陀羅」の出版と、長年行ってきた「東大寺修二会」の研究成果の一部が刊行されたことは喜びであった。また同様に新たに保存科学部化学研究室長に馬淵久夫博士を迎えた。

第5回文化財保存修復研究協議会は前回に引き続いて「木造文化財の保存と修理」を主題としたが、開所記念行事は地方文化を重視して、九州の文化財に関し、洋風画・民謡・壁画保存についての講演会を催した。

国際関係では、日米文化教育会議の展示品保存管理に関する専門家会議（ワシントン）に西川修復技術部長が出席した。このほか海外出張者は、文部省在外研究員1名（パリ）、国際保存センター（ローマ）研修員1名、研究集会・調査研究関係は延べ7名であった。これに対して、研修員は韓国から1名、来訪者はフィリピン・タイ・ソ連・チェコ・キューバ・エジプト・イタリア・韓国・台湾等の各国並びにユネスコ本部から延べ20名以上であった。

昭和51年7月

東京国立文化財研究所長　関　野　克

## 目 次

I 沿 革 .....	1
1 設 立 の 経 緯 .....	1
2 年 表 .....	1
3 歴 代 所 長 .....	5
II 設立目的と機構 .....	6
1 機 構 .....	6
2 職種別予算定員 .....	7
3 職 員 .....	8
III 土地・建物 .....	10
1 建物の面積・構造一覧 .....	10
2 建物の平面図 .....	11
IV 予 算 .....	15
1 歳 出 予 算 .....	15
2 科 学 研 究 費 .....	15
V 調 査 研 究 .....	16
1 美 術 部 .....	16
(1) 概 要 .....	16
(2) 研究調査活動 .....	18
A 一般研究 .....	18
B 特別研究 .....	22
C 科学研究費 .....	23
2 芸 能 部 .....	24

(1) 概    要 .....	24
(2) 研究調査活動 .....	25
A 一般研究 .....	25
B 特別研究 .....	27
C 科学研究費 .....	28
3 保存科学部 .....	28
(1) 概    要 .....	28
(2) 研究調査活動 .....	30
A 一般研究 .....	30
B 特別研究 .....	35
C 受託研究 .....	36
D 科学研究費 .....	37
4 修復技術部 .....	38
(1) 概    要 .....	38
(2) 研究調査活動 .....	40
A 一般研究 .....	40
B 特別研究 .....	46
C 受託研究 .....	47
D 科学研究費 .....	48
5 主要研究業績 .....	49
6 その他の研究活動 .....	59

## VI 事    業 .....

1 出        版 .....	60
(1) 美術研究 .....	60
(2) 日本美術年鑑 .....	61
(3) 金字宝塔曼陀羅 .....	61
(4) 芸能の科学 .....	61
(5) 保存科学 .....	62

(6) その他の出版物 .....	63
2 開所記念行事 .....	65
3 会          議 .....	67
4 国  際  交  流 .....	68
VII 研究施設・設備 .....	72
1 蔵          書 .....	72
2 資          料 .....	73
3 機  器・設  備 .....	74
4 黒  田  記  念  室 .....	78
5 閱  覧  室 .....	78
VIII 旧  職  員 .....	79
IX 関係法規 .....	80

# I 沿革

## 1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうへは一切これを政府に寄附すること。

## 2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同年3月9日 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図



## 沿 革

書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同 4 年 5 月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5 年 6 月 28 日 勅令第 125 号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年 10 月 17 日 美術研究所開所式を挙行了た。

同 7 年 1 月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同 年 4 月 18 日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う 5 ケ年間毎年 5 千円、合計 2 万 5 千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 年 5 月 26 日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9 年 10 月 18 日 毎年 10 月 18 日を開所記念日と定めた。

同 10 年 1 月 28 日 鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積 129  $m^2$  の書庫が竣工した。

同 年 4 月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同 年 6 月 1 日 勅令第 148 号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同 12 年 6 月 24 日 勅令第 281 号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年 11 月 29 日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同 13 年 2 月 12 日 木造、平家建、延面積 97  $m^2$  の写真室 1 棟が竣工した。

同 19 年 8 月 10 日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同 20 年 5 月 28 日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町 1 丁目本間家倉庫 3 棟に疎開した。

同 年 7 月～8 月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年4月 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

## 沿 革

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年 9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年 3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造 2階建延面積 663㎡ の建物 1棟が竣工した。

同 年 7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年 7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴い、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年 6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年 8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。

同45年 3月25日 前記の別館が竣工したので、同年 5月26日竣工式が行われた。

同45年 4月22日 芸能部は、別館 3階に移転した。

同45年 5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終わった。

同45年 6月29日 保存科学部庁舎の 1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同 年11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の 1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」に変更された。

同46年 4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地 2,658㎡ を東京国立博物館から所管換された。

同48年 4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され（昭和28年 1月13日文部省令第2号）新たに修復技術部が設けられ 4部 1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

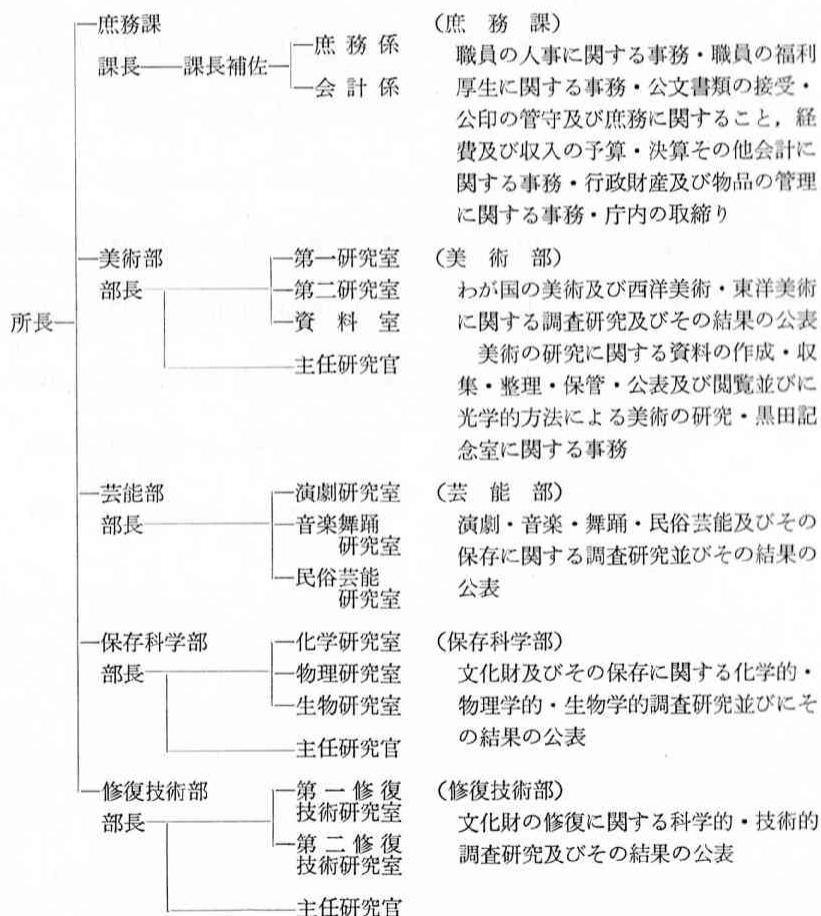
### 3 歴代所長（昭和5年～昭和51年）

主 事	正 木 直 彦	（昭和 5. 6. 28～昭和 6. 11. 24）
主 事	矢 代 幸 雄	（昭和 6. 11. 25～昭和10. 5. 31）
所長事務取扱	和 田 英 作	（昭和10. 6. 1～昭和11. 6. 21）
所 長	矢 代 幸 雄	（昭和11. 6. 22～昭和17. 6. 28）
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	（昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 15）
所 長	田 中 豊 蔵	（昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 10）
所 長 代 理	福 山 敏 男	（昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 30）
所 長	松 本 栄 一	（昭和24. 8. 31～昭和27. 3. 31）
所長事務代理	矢 代 幸 雄	（昭和27. 4. 1～昭和28. 10. 31）
所 長	田 中 一 松	（昭和28. 11. 1～昭和40. 3. 31）
所 長	関 野 克	（昭和40. 4. 1～現 在）

## Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

### 1 機 構



## 2 職種別予算定員

区 分	49 年 度	50 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	13	12
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	1	1
一 般 職 員	5	4
行 政 職 (二)	0	0
技能・労務職員	0	0
研 究 職	34	35
部長等研究員	10	10
室長等研究員	12	13
研 究 員	12	12
合 計	48	48

設立目的と機構

3 職 員

昭和51年 3 月30日現在

所 属	官 職 名	氏 名
所 長	文 部 技 官, 所 長	関 野 克
庶 務 課	文部事務官, 庶 務 課 長	幸 文 雄
	文部事務官, 庶務課長補佐	鶴 見 茂
庶 務 係	文部事務官, 庶 務 係 長	若 井 明子
	文部事務官, 庶 務 係 員	松 本 多賀子
会 計 係	文部事務官, 会 計 係 長	本 村 伝 一
	文部事務官, 会 計 主 任	鈴 木 吉 彦
	文部事務官, 会 計 係 員	正 藤 隆 生
	用 務 員, 作 業 員	小 澤 た ま
	事務補佐員	関 杉 口 富 み どり
	”	杉 浦 塚 正 司
	作業補佐員	大 岡 畏 三 郎
美 術 部	文 部 技 官, 美 術 部 長	岡 上 野 ア キ
	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	関 田 村 千 悦 子
	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	柳 澤 川 和 孝 子
	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	猪 田 実 栄 次 子
	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	田 宮 久 野 口 正 健 之 郎
第 一 研 究 室	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	久 関 中 陰 川 上 上 田 武 元 迪 弘 和
	文 部 技 官, 第 一 研 究 室 長	関 野 口 村 里 上 田 武 元 迪 弘 和
第 二 研 究 室	文 部 技 官, 研 究 員	中 陰 川 上 上 田 武 元 迪 弘 和
	文 部 技 官, 研 究 員	陰 川 上 上 田 武 元 迪 弘 和
資 料 室	文 部 技 官, 資 料 室 長	川 江 鶴 河 米 橋 市
	文 部 技 官, 研 究 員	江 鶴 河 米 橋 市
	文 部 技 官, 研 究 員	鶴 河 米 橋 市
	文 部 技 官, 研 究 員	河 米 橋 市
	文 部 技 官, 研 究 員	米 橋 市
	文 部 技 官, 研 究 員	橋 市
	文 部 技 官, 専 門 職 員	市
	文 部 技 官, 専 門 職 員	

所 属	官 職 名	氏 名
芸 能 部 演 劇 研 究 室	文部技官,	野 久 保 昌 良
	文部技官, 芸 能 部 長	横 道 萬 里 雄
	演劇研究室長事務取扱	横 道 萬 里 雄
	文部技官, 研 究 員	中 村 茂 子
	調査研究員(非)	羽 田 昶
	文部技官, 音楽舞蹈研究室	柿 木 吾 郎
	長	
	文部技官, 研 究 員	佐 藤 道 子
	調査研究員(非)	松 本 雍 雄
	郷土芸能研究室	三 隅 治 雄
保 存 科 学 部 化 学 研 究 室	文部技官, 保存科学部長	仲 井 幸 二 郎
	文部技官, 化学研究室長	江 本 義 理 夫
	文部技官, 研 究 員	馬 渕 久 敏 夫
	文部技官, 研 究 員	見 城 倉 武 夫
	物理研究室長事務取扱	門 倉 本 義 理 郎
	文部技官, 研 究 員	江 石 川 陸 定 俊
	文部技官, 研 究 員	三 浦 浦 定 俊
	生物研究室長事務取扱	江 本 義 理 夫
	文部技官, 研 究 員	新 森 英 八 郎
	調査研究員(非)	森 英 八 郎
修 復 技 術 部 第 一 修 復 技 術 研 究 室	文部技官, 修復技術部長	西 川 杏 太 郎
	第 一 修 復 技 術 研 究 室 長 事務取扱	西 川 杏 太 郎
	文部技官, 研 究 員	中 里 寿 克 輝
	文部技官, 研 究 員	西 浦 忠 輝
	文部技官, 研 究 員	青 木 繁 夫
	文部技官, 専 門 職 員	茂 木 曙 治
	文部技官, 第二修復技術研究室長	樋 口 清 彦
	文部技官, 研 究 員	増 田 勝 彦
第 二 修 復 技 術 研 究 室		



### Ⅲ 土地・建物

本研究所の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室及び別館である。

土地は、本館の敷地1,457 $m^2$  保存科学部実験室及び別館の敷地2,658 $m^2$  の計4,115 $m^2$  である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

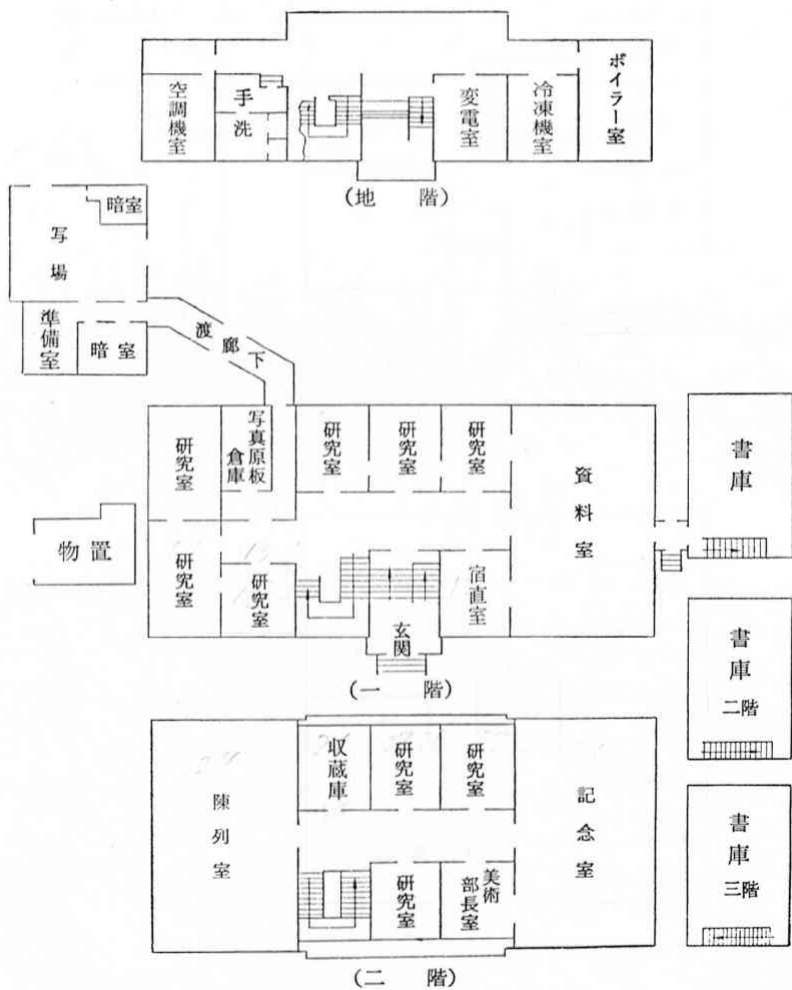
#### 1 建物の面積・構造一覧

No.	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 築 年月日	No.	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 築 年月日
1	本 館	事務所建 RC. 地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72} m^2$	昭 3. 8. 30	6	渡 廊 下 (写場)	雑 屋 建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26} m^2$	昭 13. 3. 25
2	書 庫	倉 庫 建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	昭 10. 1. 25 (32. 11. 30 3階増築)	7	車 庫 (現物置)	"	$\frac{27.96}{27.96}$	昭 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑 屋 建 RC. 平家	$\frac{4.90}{4.90}$	昭 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.44}{684.91}$	昭 37. 3. 28
4	写 場 及 第1暗室	雑 屋 建 木造平家	$\frac{62.80}{62.80}$	昭 13. 1. 8	9	別 館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	昭 45. 3. 25
5	準備室及 第2暗室	"	$\frac{35.12}{35.12}$	"	10	渡 廊 下 (別館)	雑 屋 建 鉄 骨 平 家	$\frac{27.60}{27.60}$	"

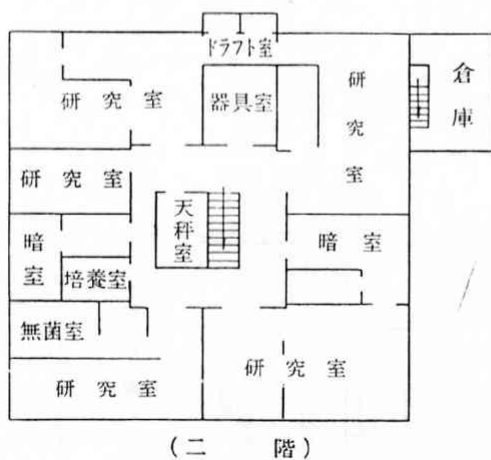
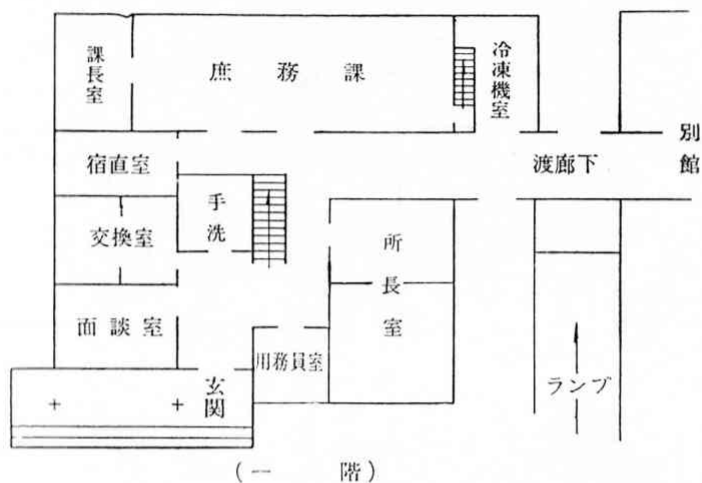
(各庁舎の縮尺不同)

美術部

(本 館)

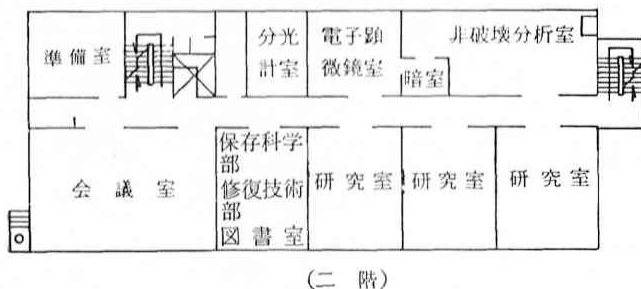
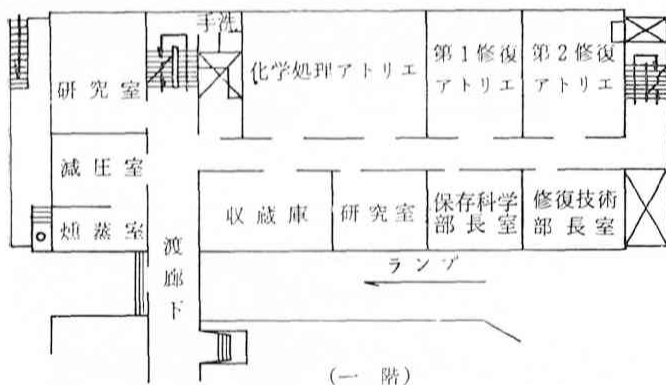
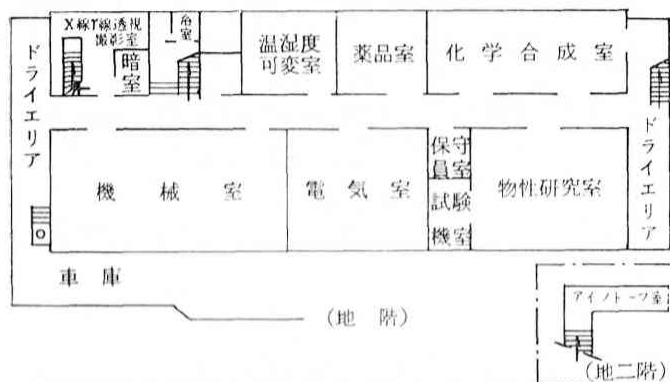


庶務課・保存科学部(実験室)

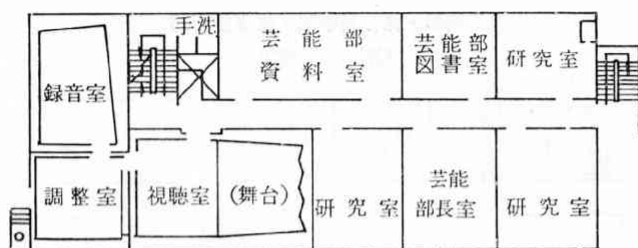


芸能部・保存科学部・修復技術部

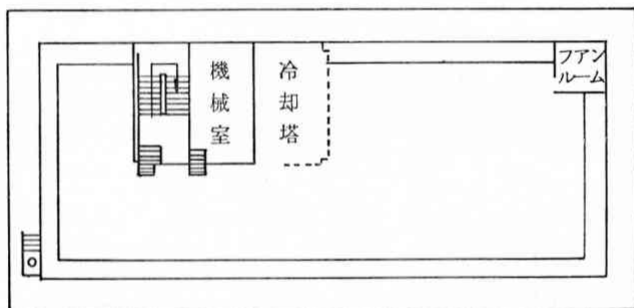
(別 館)



土地・建物



(三 階)



(屋 上)

## Ⅳ 予 算

### 1 歳出予算

注 ( ) 内は補正後予算を示す。

区 分	人 件 費	物 件 費	施 設 費	合 計
	千円	千円	千円	千円
昭 和 49 年 度	(174,065) 149,161	(61,961) 63,340	0	(236,026) 212,501
昭 和 50 年 度	(186,881) 174,843	(67,947) 72,681	(33,874) 33,874	(288,702) 281,398

### 2 科学研究費

区 分	総合研究		一般研究		奨励研究		研究成果 刊 行 費		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
		千円		千円		千円		千円		千円
昭和49年度	1	2,300	4	2,790	0	0	0	0	5	5,090
昭和50年度	0	0	5	8,350	2	590	1	2,240	8	11,180

### 内 訳

研 究 題 目	研究代表者	金 額	摘 要
日本における涅槃関係の絵画彫刻に関する研究	柳 澤 孝	千円 4,200	一般研究B
遺物の埋蔵及び保存環境における変壊現象に関する研究	江 本 義 理	1,600	〃
古代青銅器の科学的研究	石 川 陸 郎	1,400	一般研究C
仏事法要の様式技法の研究	佐 藤 道 子	880	〃
平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究	中 里 寿 克	270	一般研究D
美術工芸品保存箱の環境工学的研究	三 浦 定 俊	330	奨励研究A
エアープラッシュ装置を用いた出土金属製品のクリーニングの研究	青 木 繁 夫	260	〃
「金字塔曼陀羅」の研究	宮 次 男	2,240	研究成果刊行費
計	8 件	11,180	

## V 調査研究

### 1 美術部

#### (1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行い、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術史学研究における資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室・資料室、近代・現代・西洋美術は第二研究室、資料の作成・収集・整理・保管等は資料室が担当する。

調査研究は美術部所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行い、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めた。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」(昭和7年創刊、年6冊発行)に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行している。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来調査研究とともに力をそそいで来たが、毎年増大する資料の蓄積は、文化財関係事業等のためのみならず、部外研究者や、広く海外の研究者のためにも大きな寄与を果している。また「日本美術年鑑」には、毎年日本・東洋古美術並びに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文及び単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、美術史学界をはじめ関連ある学界に著しく貢献している。なお古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、今後もこれが継承に努めたい。

## 美術部

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基づいて創立された、美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は、黒田の作品その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開している。

### 第一研究室

第一研究室の研究員は、日本及び東洋諸地域の古美術について、各々専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、また常に精密な基礎資料の収集に努めている。その研究課題と調査研究内容は(2)項〈A一般研究〉に示す通りである。

昨年度より4カ年計画で始まった芸能部と共同の特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」の中で、絵画・彫刻・書蹟・工芸の造型部門を資料室研究員と共に担当し、研究調査活動を行った。

文部省科学研究費による共同研究としては「日本における涅槃関係の絵画、彫刻に関する研究」（一般研究B・代表者柳沢孝他8名）を実施した。

なお、第一研究室で編集を担当する「美術研究」は、出版費不足のため、残念ながら本年度は第299号～第302号の4冊を発行するにとどまった。

### 第二研究室

明治以降美術史の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査を行っている。前者については時代的に西洋美術の影響が強いことから、それとの比較研究をすすめている。

現代美術の動向に関する調査は、集積した年度資料を整理し、その結果を「日本美術年鑑」として発表したが、本年度は昭和48年・49年（各1月～12月）の内容を合併した昭和49・50年版を刊行した。

### 資料室

資料室においては、美術部研究員の調査研究及びその成果の公表のための写真の作成、図書雑誌の購入を行い、これら研究資料の整理保管に任ずるとともに、研究文献



## 調査研究

目録の作成に従事し、本年度は「日本美術年鑑」昭和49・50年版のための雑誌論文・単行図書目録を編集し、また近く刊行を予定する昭和41年以降の日本・東洋古美術文献目録の編纂を準備した。

上記の業務のほか、資料室の研究員は、日本・中国・中央アジア等の古美術についての専門的調査研究を進めてその成果を公表し、上記「日本における涅槃関係の絵画、彫刻に関する研究」や特別研究のほか他機関の科学研究費による総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」(代表者 東京大学 山根有三氏)、「瀬戸内海沿岸諸地域における近世絵画資料の調査研究」(代表者 東京芸術大学 吉沢忠氏)、「朝鮮の9～16世紀の仏教美術についての総合的研究」(代表者 実践女子大学 松原三郎氏)に参加した。

## (2) 研究調査活動

### A 一般研究

#### 1. 日本彫刻史の研究

##### (1) 古代彫刻史の研究

本年度は、金銅仏を特に選んで、東京国立博物館蔵の48体仏をはじめ、奈良、京都に現存する金銅仏遺品の調査研究を行った。(久野)

また、飛鳥・奈良時代彫刻史に関する昭和49年度発表の諸論文を検討し、その展望を「史学雑誌」に発表した。(猪川)

##### (2) 中世彫刻史の研究

平安鎌倉時代彫刻遺品については、京都高田寺、金輪寺、香川善通寺等の在銘諸像、及び千葉県下の彫刻と千葉永興寺釈迦如来像胎内納入文書の調査・撮影を行い(猪川)、鎌倉・室町時代の在銘仏像彫刻によって、仏師研究を行った。(久野)

主として「美術研究」に発表した平安・鎌倉時代の日本彫刻史に関する論文を校訂し、これをまとめて出版した。(猪川)

##### (3) 尊像別分類による彫刻の研究

菩薩形諸像の研究として、本年は京都、大阪地方の諸像に関する調査と文献の整理を行った。(猪川)

##### (4) 光学的方法による古彫刻の研究

法隆寺の百済観音、広隆寺の弥勒仏等、いままでX線で撮影した古彫刻の整理と研究を行った。(久野)

## 2. 日本古代中世絵画史の研究

### (1) 高松塚古墳壁画の研究

文化庁の依頼により、双眼実体顕微鏡による観察及び写真撮影を実施し、壁画細部の図様の彩色技法について検討を加えた。(柳沢)

### (2) 日本仏教絵画史の研究

平安時代の絵画関係資料について記録、その他の文献を渉猟し、その収集に努めたほか、前年度に引き続き、某家蔵真言八祖行状図の双眼実体顕微鏡による観察並びにX線写真等による実証的な調査を行ない、これと関連して永久寺関係の資料の収集と東寺伝来の山水屏風の調査を実施し、その成果の一部を「美術研究」に発表した。(柳沢)

経常的に行っている密教絵画の調査を継続し、特に西大寺蔵十二天画像について、重要文化資料選定協議会において、問題点の検討を行った。(柳沢・関口)

### (3) 経絵の研究

中尊寺、談山神社、立本寺に蔵される金字宝塔曼陀羅の研究をまとめた。(宮)

また、金剛証寺蔵法華経、延暦寺蔵金銀交書法華経の表紙・見返絵の調査研究を行った。(江上・宮)

### (4) 絵巻物の研究

絵巻研究の一貫として、本年は特に平治物語絵巻の画面構成とその製作年代、東寺本弘法大師行状絵巻の成立に関する諸問題を検討し(宮)、遊行上人縁起絵諸本の系統に関する研究を遠山記念館本を中心に行った。(米倉)

新しく調査した作品としては、武藤家蔵歓喜天靈驗記について、写真撮影を行った。(宮・江上)

### (5) 肖像画の研究

肖像画に関する基礎資料の収集(宮)、及び藤原隆信・信実と「似絵」の研究を行った。(米倉)

### (6) 日本古代文様の様式的、形式的研究

天神社蔵法華経料紙の文様を調査研究したほか、正倉院関係の文様並びに、関連あ

## 調査研究

る大陸の文様について研究した。(江上)

### 3. 近世絵画資料の収集と研究

#### (1) 宗達光琳派の研究

フリーア美術館, ボストン美術館, 心遠館等の所蔵品を調査。(河野)

#### (2) 狩野派・雲谷派の研究

科学研究費「瀬戸内海沿岸諸地域における近世絵画資料の調査研究」に参加, 毛利美術館, 萩及び松江の個人コレクションを調査。科学研究費「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」に参加, 仁和寺で狩野孝信筆賢聖障子等を調査撮影。(河野)

#### (3) 江戸洋風画についての研究

オランダ国立ライデン民族学博物館蔵の川原慶賀作品に関する調査研究を続行。  
(陰里)

### 4. 和漢書道史の研究

#### (1) 日本書道の歴史的研究

日本書道の最高峯, 平安時代の三蹟(小野道風・藤原佐理・藤原行成)の作品並びに伝記を従来の伝説にとらわれず, 実証的に研究し, 三蹟の歴史的意義を明らかにした。(田村)

#### (2) 異体字の歴史的研究

多年に亘って蒐集した異体字資料を体系化し, 中国の異体字文献(碑別字等)を参照して日本資料から蒐集に入らなかった形体等を補充している。(田村)

### 5. 日本工芸史の研究

現在は陶磁・漆工・金工の研究員は不在で, 染織専門の田実が必要に応じこれらの調査にも当たっているが, 主たる研究題目及び調査活動は下記の通りである。

#### (1) 近世初期染織品の研究

#### (2) 小袖の研究

#### (3) 伝統的染織技術の調査・研究

#### (4) 上代裂の研究

研究題目の中, 特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては, 上杉神社蔵の上杉謙信所用袴類, 宮城県白石市の片倉家伝来胴服・陣羽織類, 和歌山・東照宮伝来服飾類の調査が本年の主なものである。「小袖の研究」は和歌山・東照宮蔵品

の家康所用小袖四領の調査研究と片倉家伝来黒緇子小袖の修復技術部との共同研究（修復技術における）が主となり、「伝統的染織技術の調査・研究」は「型染」「絞り染」「絰」等を主として沖縄本島及び八重山・宮古群島地方のものを現地調査した。なお日本伝統工芸展の審査員として加った。「上代裂の研究」は東京国立博物館蔵品の法隆寺裂や正倉院裂、昭和50年秋の正倉院展出陳染織品の調査を通してすすめた。（田実）

## 6. 中国絵画史の研究

中国絵画の調査研究は、国内及び海外において、下記の如く行った。

- (1) 経常的に行っている宋元明清及び民国期の作品並びに画家資料の収集と調査を継続した。（川上・鶴田）
- (2) 香港中文大学文物陳列館寄託何氏コレクション及び、趙・招・郭家收藏の明清画と現代中国絵画を調査した。（川上・鶴田）
- (3) 台北、故宮博物院収蔵大理国画梵像1巻など、仏教絵画遺品の現地調査を行った。（関口）
- (4) 台北、故宮博物院宋代絵画特別展出陳作品並びに王鑑画を調査した。（川上）

## 7. 朝鮮仏画の研究

科学研究費（総合研究A）「朝鮮の9～16世紀の仏教美術についての総合的研究」の絵画部門を担当、1320年銘奈良松尾寺釈迦八大菩薩像を中心に14世紀前半の高麗仏画約15点、1551年銘徳島地藏寺葉師說法図ほか16世紀後半の李朝仏画約15点、並びに新羅時代とされる延暦寺蔵紺紙銀字法華経などを調査検討した。（上野・江上）

## 8. 中央アジア古代絵画史研究

ソ連タジク共和国アジナ・テベより東へ、中国のキジル、クムトラ、ベゼクリク、敦煌に至る各遺蹟の涅槃像及び涅槃図の資料を収集し検討した。又ベゼクリクにおける密教図像につき研究を続行中である。（上野）

## 9. 近代日本美術史の研究

(1) 幕末明治初期の画家のうち主として日本画家の作品、伝記資料についての調査研究。（関）

(2) 黒田清輝、青木繁、古賀春江などの書簡文献資料の調査、特に橋口家収蔵黒田書簡289点について調査整理（関）、梅野家収蔵青木書簡、松田家収蔵古賀書簡の調

## 調査研究

査（陰里）。大正期における二科会、院展洋画部、草土社などの新興美術団体の調査、作品・文献資料の調査。（岡）

（3）大正・昭和前期の彫塑界の動勢について、特に北村西望の業績に関する諸資料の収集調査、評伝作成。（中村（伝））

（4）版画史の研究——浮世絵版画及び明治以降新版画運動に関する調査。（岡）

## 10. 現代美術の動向についての研究

下記部門別によりそれぞれの調査を行った。

日本画（関）

洋画（陰里）

彫刻・立体造型（中村（伝））

版画（岡）

## B 特別研究

「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」

分担課題

わが国における浄土教美術の成立と展開（久野）

浄土教関係諸尊像の様式変遷の研究（猪川）

来迎図の研究（関口）

浄土変相の研究（柳沢）

浄土教説話図の研究（宮・江上・米倉）

浄土教寺院における障壁画（河野）

親鸞聖人筆蹟の研究（田村）

浄土教関係繡仏及び袈裟の研究（田実）

中国・朝鮮における浄土教絵画の展開（川上・上野・鶴田）

日本文化史上、仏教の占める位置は極めて重要であるが、特に平安時代中期以降、浄土信仰は、宗派にかかわることなく広く普及し、国民生活と密着して展開してきた。そのため浄土教が文化に及ぼした影響は多大である。よって、浄土教とそれに関する有形・無形の文化財との相互関係及び絵画・彫刻・工芸・芸能等各分野間の相関関係を美術・芸能部門が総合的に調査研究するのをその目的とする。

本年度において重点的に行った調査活動については、彫刻部門では、7・8世紀における阿弥陀如来像の発願理由を銘文及び文献から探求し、成果を得たのをはじめ、浄土教関係諸尊像を尊像別に分類整理した。絵画部門では諸宗祖師の伝記絵の成立と各祖師伝絵についての系統的整理を行い、あわせて散逸した断簡の追跡調査を行って成果を得た。書蹟部門では、昨年度に引き続き、親鸞上人の筆蹟を検討し、宋代書風の影響を受けていることを認めた。さらに大陸関係部門では、特に朝鮮の浄土教関係仏画の調査を行った。

### C 科学研究費

「日本における涅槃関係の絵画・彫刻に関する研究」(一般研究B 代表者 柳沢孝)  
分担課題

- (1) 平安時代から室町時代までの仏涅槃関係絵画の調査研究 (柳沢・宮・江上・関口)
- (2) 桃山時代以後の仏涅槃図の調査研究 (河野)
- (3) 仏涅槃像の調査研究 (久野・猪川)
- (4) 大陸における仏涅槃図・仏涅槃像の展開 (川上・上野)

本研究は各地に散在する多数の仏涅槃図並びに仏涅槃像を調査撮影して資料の収集に努めると共に、それらの遺品を図像学的に分類整理し、かつ個々の作品について様式技法の検討を加え、また大陸における涅槃図関係の資料の収集と比較考察とを行い、もってわが国における仏涅槃図の諸相を実証的に明らかにしようとするものである。

絵画班では、国宝及び重要文化財の指定品に重点をおき、東京、京都、奈良の国立博物館藏品並びに寄託品、また大阪市立美術館寄託品の計22件のほか、根津美術館本、万寿寺本、浄教寺本、長保寺本、宗祐寺本など、さらに北陸や北九州の各寺院所藏品について調査撮影を実施した(総計35件、中国画2件を含む。)彫刻班も同様重要文化財指定品を中心として岡寺他3件を調査撮影したほか、仏伝関係として誕生仏10数体の調査をも合せ行った。

以上の調査結果に基づく仏涅槃図及び仏涅槃像についての研究考察は目下進行中で、成果は『美術研究』その他の学術誌に逐次発表される予定である。

## 調査研究

### 2. 芸能部

#### (1) 概要

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞蹈研究室・民俗芸能研究室の三室より構成されている。

芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備・記録の作成としての撮影・録音などの作業を行う。また研究の結果は刊行・公開学術講座の開催などによって公表する。

今年度は、部内各研究員が2名ないし数名のグループをつくって、能の様式の研究等いくつかのテーマによる共同研究を行い、また美術部と共同による特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」(49年～52年度4カ年計画第2年度)に各研究室とも参加し、浄土教関係の寺院行事の調査並びに資料の収集を行った。

刊行物としては「芸能の科学」6「東大寺修二会の構成と所作」上(担当者佐藤)を6月に刊行した。同書はなお中巻下巻別巻の3冊を引続き刊行の予定で、編集作業を続行している。また、安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、「音盤目録」Ⅲ・Ⅳの刊行準備を進めた。

例年ひらく公開学術講座は本年度は行わなかったが、研究者を対象とした「能の技法」についての連続研究発表会を行った。また「東大寺修二会の構成と所作」についての研究会を部内研究員によって毎週行った。

#### 演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的・演劇学的に調査・研究を行い、またこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても、調査・研究を進めている。

本年度、演劇研究室では、個人研究として「古典芸能便覧の作成」「芸能伝承方法の研究」「歌舞伎演目の通行場名の選定」を行い、共同研究として、他の研究室との協力により「能の様式の研究」「寺院行事の研究」「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」を行った。

## 音楽舞踊研究室

日本音楽及び日本舞踊について芸能学的、音楽学的に調査、研究を行い、さらにこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても調査、研究を進めている。

個人研究としては「伝統歌曲の音楽分析的研究」「寺院行事の研究」「能の脚本史の研究」が進められており、共同研究の「浄土教関係文化財に関する総合的研究」「能の様式の研究」に各研究員が参加している。

## 民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承する民俗芸能を対象とし、それらの芸能と保存・活用に資するために必要な研究を行っている。今年度は一般研究として「郷土芸能の研究」「民俗芸能伝承方法の研究」「民謡の研究」「獅子舞の研究」「話芸・寄席芸の研究」を行い、特別研究としては「浄土教関係文化財に関する総合的研究」に研究員が参加して他の研究室員と共に共同研究を行った。また例年行われる全国及び地方別の民俗芸能大会に出場した芸能の撮影・録音を行った。

## (2) 研究調査活動

### A 一般研究

#### 1. 能の様式の研究

能楽全般にわたる構成及び技法の研究の成果を公表するための準備作業を、前年度に引き続いて行った。特に、謡事（小段）と扮装類型のそれぞれについて、性格・名義・分類・形態・用法・交換性等の検討を重ね、面・装束の技法概説に着手した。（横道・佐藤・松本・羽田）

#### 2. 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行い、その変遷・分化をあとづけることを目的とするが、本年度は、41年度以降継続的に実施している東大寺修二会の研究調査についてのまとめと、



## 調査研究

特別研究による浄土教関係の法儀の研究調査に主眼を置いた。

前者に関しては、研究調査録の第一冊を「東大寺修二会の構成と所作 上」として刊行し、更に51年度刊行予定の第二冊のために、補足的な研究調査を行った。

後者に関しては、特別研究の欄に記した通りである。(横道・佐藤)

### 3. 民俗芸能伝承方法の研究

獅子舞及び太鼓踊系統の伝承方法について資料の収集を行った。(中村(茂)・三隅)

### 4. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を、その行われる季節・場所、参加する人などの面からとりあげる連続した研究の一環として、引き続き「道中の芸能」に関する調査研究を行っている。(三隅・仲井)

### 5. 民謡の研究

芸謡的要素をもつ民謡に関する研究で、上代から近世に至る日本の歌謡伝承の上に占める芸謡の位置を究明する目的をもって、前年度に引き続き特に近世歌謡の分析を行っているが、あわせて本年度は、さらに童唄を通しての調査も加味して続行中である。(仲井・三隅)

### 6. 古典芸能便覧作成の研究

古典芸能の基礎資料となるべき年表・演目・作者・文献等について網羅的に集めた便覧作成の作業を進めた。(中村(茂))

### 7. 歌舞伎演目の通行場名の選定

歌舞伎技法の研究対象である通行演目表(119 篇)に基づき、さらにそれぞれの通行〈場〉を選定すべく基礎調査を行った。(羽田)

### 8. 伝統歌曲の音楽分析的研究

伝承・記録・保存のための基礎研究として伝統歌曲を音楽的に分析し、その音楽性を音楽学的に解明するもので、今年度は次の調査・研究が行われた。(柿木)

- (1) 仏光寺派声明の基礎的調査と録音
- (2) 本願寺派声明の基礎的調査と録音
- (3) 大谷派声明の基礎的研究と録音
- (4) 長唄(研精会派)における一部古楽句の調査と録音
- (5) Melograph による上記録音資料の分析実験

## 9. 能の脚本史の研究

能一曲を形作る構想にも類型（様式性）が認められることから、その分析を通じて作者別・時代別による特徴をさぐることを目的とするもので、前年度に引き続き現行曲を対象に分析作業を進めた。（松本）

## 10. 獅子舞の研究

獅子舞は現在全国に分布する民俗芸能の中でもっとも数量の多い芸能である。本研究はそれら獅子舞の分布状況と各地における変遷経過を調査しようとするものであるが、本年度は長野・和歌山・岐阜県地方の調査研究を行った。（三隅）

## 11. 話芸・寄席芸の研究

落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究を、安原コレクション邦楽レコードの整理を通じ続行中である。（仲井）

# B 特別研究

## 浄土教関係の文化財に関する総合的研究

### 分担課題

わが国における浄土教芸能の展開（横道）

念仏踊の研究（三隅）

念仏狂言の研究（三隅）

練供養の研究（三隅）

念仏讃の研究（柿木）

六時礼讃の研究（佐藤）

日本文化史上重要な位置を占める浄土教信仰は、わが国民生活に密着して展開して来た。この浄土教に関する有形・無形の文化財について、美術・芸能両部が文化史的視野で総合的に研究することを目的とする。

本年度は、天台宗の法華大会<sup>ほつげだいえ</sup>・天台宗真盛派の伝法灌頂会<sup>でんぽうくわんじやうえ</sup>という二大法儀の研究調査と、千葉県銚子市・東金市・一宮町・海上郡等各地の念仏芸の研究調査を行った。

また、当研究所録音室において、真宗大谷派声明の代表的旋律型の録音を行った。

## 調査研究

### C 科学研究費

仏事法要の様式技法の研究（一般研究C 代表者 佐藤道子）

近年、正しい伝承が急速に失われつつある寺院行事について、緊急に実地調査を行い、その様式・技法の面からの比較研究を行うことによって、仏事法要の諸形式の成立・分化の過程を具体的にあとづけることを目的とする。

本年度科学研究費の交付によって、調査を中国・九州等遠隔の地に及ぼすことが出来たため、天台宗（四天王寺・成仏寺・天念寺）・古義真言宗（金剛峯寺・備前西大寺・遍照寺・地藏院）・新義真言宗（観菩提寺）・志貴山真言宗（朝護孫子寺）の四宗派九箇寺院における現状の実地調査を行うことが出来た。以上により、悔過会<sup>けあえ</sup>に関しては各宗派にわたる調査を全国的にはほぼ完了した。この調査資料を、これまで収集した南都諸寺の悔過会資料と合わせて、各法会の構成要素の比較分析を行いつつある。

## 3. 保存科学部

### (1) 概要

文化財の材質・構造の科学的分析研究、並びに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い、これを基盤として文化財の保存に関する技術的研究をしている。研究の成果は指定、保存対策、修復処置の解決の基礎資料として役立てられている。

また見方を換えれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3研究室からなっている。

### 化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究、並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。すなわち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究が主な内容である。

具体的には、微量分析及び非破壊分析による材質の研究、赤外線吸収及び粘弾性測定による漆の劣化過程の研究、展示、保存環境における空気汚染の文化財への影響に関する研究、保存処置用薬剤の材質への影響の研究等を行っている。

### 物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財自体の構造・強弱・安定等の研究のため力学的試験を行い、あるいはX線、 $\gamma$ 線のラジオグラフィーによる内部構造、欠陥、虫害、腐朽の解明、赤外線テレビによる銘記、下絵等の判読、超音波による診断等の研究が行われている。

また文化財の保存環境に関し、採光、照明、温湿度等の影響とその防止の研究、展示、収蔵、梱包輸送の際の適正条件の設定と調節技術を開発し、新施設使用の際の必要処置の研究を行っている。

### 生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。微・細菌・昆虫等による被害調査、並びに微・細菌・昆虫等の採取・培養・同定及びそれらの殺菌・殺虫等防除用薬剤の選定と方法の研究及び実施の指導を行っている。

以上の各研究室の担当研究員の専門分野の基礎的研究の他、数人による部内の共同研究が行われている。それらは複合的な判断、処置を必要とするもので、保存用薬剤の適否、輸送梱包に対する処置、展示施設の適否に関する研究、虫微の調査と対策、及び高松塚壁画保存対策への協力がその例である。

特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究」は3カ年計画の2年次として、修復技術部と共同して、各分担課題の研究を継続遂行している。

受託研究は、修復技術部と協力して行った仙台市、瑞鳳殿出土副葬品の保存、広島市平和記念館出陳原爆資料保存法、史跡加曾利貝塚遺跡の保存、国宝・重文日光社寺文化財保存の4件が行われた。

## 調査研究

### (2) 研究調査活動

#### A 一般研究

##### 1. 保存処置用薬剤の文化財に及ぼす影響調査

殺菌、殺虫、防黴、防虫処理、消火に用いられる薬剤の直接及び二次的に文化財に腐食、変色、汚損等の影響を及ぼすことの有無について調査を行っている。

顔料、染料、金属等の各材質に対する影響を検討し、対象別に適否の選択を行うため実験を重ねた。

本年度は次の燻蒸剤、消火剤について行った。

##### 燻蒸剤

###### (1) 弗化スルフリル（バイケン）

前年度までに薬効、影響について実験を行って来た。

微量の酸性物質の混入が検知されたのでガスクロマトグラフ分析等を行ったが、まだ同定に至っていない。（江本・見城・門倉・石川・森・新井）

###### (2) 燐化水素（ホストキン）

1 錠/m<sup>3</sup>の濃度、20°C、24時間燻蒸の場合、湿度条件を変えて実験を行ったが、高湿度において顔料、染料金属の一部が変色し、特に銅の変色が著しかった。黴には無効であった。（馬淵・見城・門倉・森・新井）

###### (3) DDVP（バナプレート）

ジメチルジクロロヴィニールホスフェートを合成樹脂シートに含浸させたもので、室内に吊し、薬剤を揮散させ殺虫効果をねらったものである。2カ月後、顔料のうち密陀僧のみ変色、金属試片、銀、鉄に変化が認められた。黴には無効であった。（江本・見城・門倉・新井・森）

###### (4) 三弗化臭化メタン（ハロン）

直接接触及び火焰による分解生成物の酸性物質の影響が考えられる。気化したガスの影響に関しては、濃度10%においても顔料、金属等に影響は認められなかった。この濃度は、設計配置した消火剤が全部放出された時点の室内濃度を幾分上廻る濃度である。（馬淵・見城・門倉）

## 2. 海外展輸送梱包に対する保存科学処理

下記の海外で開催した日本美術展覧会出陳の御物、文化財について燻蒸、密閉梱包ケース内の調湿剤の調整、防霉剤の封入、梱包材の選定、梱包時の湿度測定等につき必要な協力及び指導を行った。(江本・見城・門倉・三浦・森・新井)

(1) 天皇、皇后両陛下訪米記念御物展 (ワシントン 9.18~10.5, ニューヨーク 10.12~29)

(2) 書の美展 (西ドイツ ケルン市立東亜美術館 10.24~12.7)

## 3. 施設内保存環境調査

展示あるいは収蔵施設内の温湿度、照明等の環境の測定、新設施設のコンクリートの乾燥、内装材の影響の判定、シーズニングの検討を行い、展示、保存環境の適否に関し調査を実施してきている。

本年度の調査対象は下記の通りである。(石川、三浦、江本)

- (1) 茨城：日立市郷土博物館 (50.4)
- (2) 愛知：知多市資料館収蔵庫 (50.5)
- (3) 東京：東京都美術館 (50.8)
- (4) 群馬：群馬県立美術館 (50.7)
- (5) 千葉：千葉県立美術館 (51.1)
- (6) 岐阜：岐阜県立博物館 (51.3)
- (7) 神奈川：遊行寺宝物館 (51.3)
- (8) 神奈川：平塚市博物館 (51.3) (以上石川)
- (9) 東京：明治神宮宝物殿 (50.10) (石川・三浦)
- (10) 福岡：北九州市立歴史博物館 (50.6) (江本)

## 4. 昆虫、微生物等による文化財の生物劣化調査とその防除処置

文化財の食害虫による被害は、黴、微生物の発生が併発している場合もあるので昆虫及び微生物の担当者が共同して調査に当たることが多い。本年度は下記の調査及び防除処置の指導を行った。

(1) 日光東照宮、二荒山神社、輪王寺における生物劣化を調査し、特に東照宮神廬のシバノムシ類の被害が甚しかったので、被覆燻蒸の緊急実施を勧め、施工法を指導した。

## 調査研究

(2) 千葉、伊能忠敬記念館に収蔵されている重文の古文書、和書、地図の虫害を調査、フルホンシバンムシによる被害と認め、燻蒸作業の現場指導を行った。

(3) 東京国立博物館内、書庫、文化庁無形文化課分室、北倉庫の虫徴害の有無の調査を行い、燻蒸実施を指導した。

(4) 東京国立博物館鎌倉彫刻展出陳、静岡願成就院 重文木造・不動、毘沙門天像の燻蒸処置。

(5) 細川家永青文庫内の虫害を調査し、燻蒸処置を勧めた。(以上森・新井)

(6) 重文根津神社楼門のむれ腐れ調査及び補修材の防腐処理の指導を行った。(新井・森・石川・三浦)

(7) 東京国立博物館 東洋館民俗衣裳の燻蒸処置。(新井・門倉)

(8) 岡山、重文閑谷学校、聖廟大成殿・閑谷神官の被覆燻蒸の現場指導を行った。(森・門倉)

5. 特史・国宝高松塚壁画保存対策(修復技術部と共同研究、関連項目46頁参照)  
前年度に引き続き、文化庁が行っている高松塚壁画保存対策への協力を行った。

(1) 石室開口時採取した空気試料及び空中落下微生物因子は持帰り、空気組成を測定、微生物学的調査を行った。(江本・門倉・新井)

(2) 調査、修復作業時の石室内、保存施設内外の温湿度、炭酸ガス等の環境変化の基礎データーを収集し、空調設備の運転状況の検討、作業環境の保全のため、炭酸ガス、トリクロロエチレンの除去等、空気浄化処理の実験を行った。(江本・門倉・三浦)

## 6. 文化財の材質に関する研究

(1) 非破壊の方法、微量試料による諸分析法とそれらの精度向上に関する研究。

(2) 各種材質の判定とそれらの劣化現象の究明、及び年代、産地の標準試料の材質に関する分析データーの蓄積。

考古資料の金属器(金銅仏、鏡、小銅鐸、匙等)ガラス、初期洋画関連資料の顔料等を主としてX線分析により材質を分析、技法との関連を調査した。

滋賀、西明寺本堂仏像表面の白色析出物を調査し防虫剤の結晶と推定した。

京都、桂離宮の土壁のうち色壁の材質と色彩の調査を行った。(江本)

金属器の非破壊分析に関する研究。

蛍光X線分析の定量化を目指して標準試料の検討を行った。(馬淵)

## 7. 古墳内部空気組成に関する研究

前年度に引き続き、ガスクロマトグラフィーによる空気組成の分析法を検討した。本年度は、適当な対象古墳が得られなかったため、基礎実験のみに終った。

又、高松塚古墳壁画修理に伴う石室内汚染空気の排出処理に関する基礎実験として、ビニールシートで作った石室模型により、排気法、汚染空気処理法を検討し、活性炭を用いた空気浄化処理装置を試作した。(門倉)

## 8. 考古遺物、遺跡に関する考古化学的研究

発掘時に埋蔵環境での変質と保存環境での変壊を考慮して、遺物取上げ時に考古化学的調査のための測定項目、方法等を確立するため、変壊生成物等を分析、変質機構、測定法等を検討した。

保存環境における変質現象に対し気象条件等を考慮して横穴、遺構等の保存対策の調査を行った。主な調査対象は下記の通りである。

江差：開陽丸引揚げ委員会に委員として出席、保存処理法を指導した。また船の金属部品等の材質および腐食生成物を分析調査し、脱塩方法を検討し浸漬処理条件を設定した。

装飾古墳の保存対策として、保存処置、保存施設に関する調査、指導を行った。福岡：史跡綾塚古墳、史跡珍敷塚古墳、佐賀：史跡田代太田古墳、福島：史跡羽山横穴(江本)

## 9. 漆塗膜の硬化、劣化過程の研究と保存対策

### (1) 古い漆膜の保存法

伊達政宗墳墓、草戸千軒から出土した漆膜を R.H 98% から徐々に乾燥させながら、弾性率をはかると、R.H 92~90% 近くで、急に弾性率が落ち、膜が切れる。これに対して新しい漆膜は R.H 100% から55%位迄乾燥させても、膜は切れない。そこで長い間高湿の雰囲気中に置かれていた漆膜は R.H 90% 以下には保存出来ないことがわかった。(見城)

### (2) 産地別の生漆の研究

一般の日本産漆と比較して、ベトナム、タイ産は高湿では固化がおそく、光沢もにぶいが、製漆方法によれば実際に使えることがわかった。(見城)

建造物の内装材から出る揮発成分が文化財の材質に及ぼす影響、顔料、染料、漆の



## 調査研究

影響を見た。(見城)

### 10. 空気汚染が文化財に及ぼす影響に関する研究

収蔵庫、展示場などの文化財保存、展示環境における粉じんの挙動を知るため、当研究所の1室(6m×6m×4m)において、パーティクルカウンターを用い、粒度分布、温度変化による粉じんの移動などを調べた。1 $\mu$ 以上の粒子は比較的短時間に沈降するが、これ以下の粒子は、空気の対流に似た挙動を示した。

これらの粉じんが文化財に及ぼす影響を究明するため、粉じん粒子が吸着している有機物のガスクロマトグラフィーによる分析法を検討した。(門倉)

### 11. 博物館・美術館等の照明の研究

現在市販されている蛍光灯の分光特性をチェックし各種展示物に適する蛍光灯の選定を行った。同時に紫外線除去効果の測定を行った。また最近開発されている紫外線除去フィルム・アクリル板・塗布剤等の吸収特性の調査も行った。(石川)

### 12. 放射線による透視研究

建造物の構造解明、腐朽箇所等の判定はX線にて行っていて、具体例として重要文化財根津神社楼門の透視調査を行った。漆芸品の技法及び構造調査はX線にて行いが、主に平安、鎌倉時代の漆芸品の透視を行った。金属製品については金銅仏は $\gamma$ 線にて透視を行い巣の状態、厚みなどの調査に効果を上げた。古代青銅器ことに刀剣類においては鋳造時における巣の状態をX線にて透視を行っており、成分との関係を知るとともに合金を構成する成分の差によって鍛造の可否を研究した。(石川)

### 13. 超音波工学の文化財への応用

腐朽による木材の力学的性質の変化について、水浸しで出土した木材を対象に超音波の実験を試みた。腐朽材と健全材との間に違いを見出すことができたが、木材の比重の影響など今後検討すべき課題が残された。実験の結果は保存科学15号に発表。

その他、金属製品への応用に関連して第7回超音波探傷試験技術講習会(51.3)に参加した。(三浦)

### 14. 赤外線TVカメラの文化財への応用

解像力・判読力などの性能を、色々な試料を作って調べた。従来からある赤外線フィルムに比べて解像力は劣るが、結果がその場でわかるという迅速性がこのTVカメラの大きな長所である。

その他、新しい赤外線技術に関連してリモートセンシングシンポジウム (50.10) に参加した。(三浦)

#### 15. 環境に適した膠の使用法についての研究

鹿、鮫、兎、馬からつくられる膠の種類によって、接着力が全く違う。粘弾性をはかることによって、低温低湿の場所に使用する膠は柔軟な膜(鮫、兎膠)が適しており、逆に高温高湿の場所には、かたい膜(馬膠)が適していることがわかった。(見城)

#### 16. 微生物による文化財の生物劣化及びその防除に関する研究

文化財の各材質に発生する微生物の採取とその分離を行い、生育条件を調査研究した。

微生物の発生に対する処置としては

- (1) 前年度調査を行った奈良南明寺木造重文、薬師如来、阿弥陀如来、釈迦如来座像に発生した糸状菌に対し、チモール5%メタノール溶液を防黴剤として散布し、防除処置を行った。
- (2) 法隆寺焼損壁画表面の防黴処置として、チモール5%メタノール溶液を用いた。
- (3) 日立市郷土博物館、収蔵庫内装板に発生した黴の殺菌法(ペンタクロロフェノール)を指導した。(新井)

#### 17. 虫害及びその防除に関する研究

加害昆虫の採集と種類の同定、及び環境条件と発生原因などの調査、燻蒸処置に関しては薬剤の選定、効果の判定を行った。(森)

#### 18. 燻蒸剤排気処理に関する研究

前年度試作した活性炭吸着法による無害廃棄装置の実用化実験を行った。約 1,000 m<sup>3</sup> の被覆燻蒸後の残留薬剤処理を行ったが、時間に制限があったため十分な効果が確認できなかった。収蔵庫内で行った被覆燻蒸(6カ所)では庫内には全く薬剤を排出しなかった。(門倉)

### B 特別研究

軸装等の保存及び修復技術に関する科学研究

(江本・馬淵・見城・門倉・石川・三浦・新井)(修復技術部と共同研究, 46頁参照)

## 調査研究

### C 受託研究

#### 1. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究（修復技術部と共同研究，関連項目47頁参照）

建造物外装材としての漆，唐油彩色，極彩色，生彩色の塗装および彩色の多湿環境における劣化，変色等の防止対策を行うのを目的とする。

前年度，実地調査の際多くの問題点が指摘されたが，本年度は下記の二点に研究対象をしばることとした。

##### (1) 手板による彩色への防黴剤の影響と老化試験

彩色等の汚損の原因である黴害の対策が各社寺において大きな比重を持っているため，防黴処置に関するものを採り上げ，市販の防黴剤の中から，日光の社寺の修復に用いられている材料に影響のない薬剤を選択すると共に，ウェザロメーターにより，処置後の長期間の変化についても検討を加える。

試供防黴剤として，サイアベンダゾール，オルソ・フェニルフェノール他2点につき，日光の彩色技法及び材料により作成した手板について処置を行い，色彩計による測定後，長期変化の観察中である。（江本・見城）

##### (2) 新旧彩色の保存状況の調査と写真記録作成

変退色の基礎資料となる当初部と補修部の調査と写真撮影を行った。（西川・中里）  
なお，前年度に引き続き，劣化現象の基本である気象条件の観測のため，3地点（東照宮拝殿脇，二荒山神社本殿脇，大猷院拝殿）で温湿度の測定を続行している。特に寒冷期と夏期の温度差が大きいため計器の調整，保守が難しい。（三浦）

#### 2. 史跡加曾利貝塚の保存及び修復のための科学研究（修復技術部と共同研究，関連項目47頁参照）

屋外展示施設の貝層断面の一部を実験コーナーとして間仕切りし，加湿を行って土中水の蒸発を抑え，折出物による白化現象防止実験を行っている。従来の設備は密閉，断熱が不十分であったので，本年度，硬質発泡ウレタンによる密閉作業を行った。

密閉により加湿が有効になり，加湿素子も交換したため日中の温度上昇による影響が抑えられおおむね常時93%を保てるようになった。また湿度測定センサーも貝層断面とガラス面との間で，貝層の，上，下，ローム層の位置に設置し，コーナの上中下の各部分における細かい温湿度分布の測定を行っているが，3点の差はなく，均一

になっていることが観測された。その他、地表面の乾燥による細かいめくれや粉化を止めるべく、ウレタン系土質改良剤、タックスを注入し表土を固定強化する実験施工を行ったが不適當であった。

貝層断面の崩壊防止には、純貝層に対してはメチルメタアクリレートのオリゴマーの注入、混貝土層にはイソシアネート(EXP)の注入強化を試みたが、樹脂の水分のための白濁現象(オリゴマー)、収縮(イソシアネート)等が見られ、もう少し経時変化を見極めないと結論は出せない状況であった。(江本・石川・三浦・樋口・茂木・青木)

### 3. 仙台市伊達政宗墓所出土副葬品の保存と修復に関する研究(石川・三浦)

(修復技術部と共同研究、関連項目48頁参照)

X線調査(石川)

湿度調整(三浦)

### 4. 広島市平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学研究(江本・馬淵・見城)(修復技術部と共同研究、関連項目48頁参照)

陳列ケース内の不活性なガス封入による環境保持(見城)

黒い雨痕跡の分析(江本・馬淵)

## D 科学研究費

### 1. 遺物の埋蔵及び保存環境における変壊現象に関する研究(一般研究B 代表者 江本義理)

考古遺物の埋蔵時における地下水、土壌等の環境による変質と、発掘時から起る大気中の変質、保管中の崩壊現象の機構を解明し、適切な保存処置を施すのを目的とする。

広島草戸千軒遺跡において、埋蔵環境の湧水、川水につき pH、電導度、二価鉄等の測定を行った。同一遺跡でも包含層の土壌、水の違いにより環境が異なり、可能な限り緻密に測定点を設けることが必要であることが確認できた。

石造品露出保存の際の凍結、融解による変質現象を解明するため、低温示差熱分析を行い、石質(砂岩と泥岩)により水分の凝固の様相、塩類(硫酸ナトリウム)の影響、及び凍結融解ピークのプロファイルが異なることが認められた。

埋蔵環境において金属器の成分溶出状況を調査するため、青銅鈴の下周辺の土壌の

## 調査研究

銅の含有量を測定し、この黒色土層の場合直下以外周辺には余り拡がっていないことを認めた。

### 2. 古代青銅器の科学的研究（一般研究C 代表者 石川陸郎）

#### 分担課題

青銅器の熱的影響及び光学的研究（石川）

変形に関する力学（三浦）

分析的研究（江本）

青銅器の鍛造法の研究（東京芸大助手，新山栄）

古式鑄造法の研究（東京芸大講師，戸津圭之介）

考古出土の金属製品には銅製のもの鉄製のものなどがあるが銅製品について科学的方法で製作技術を追求していくことに目的をおいた。

古式炉の組立てを発掘された炉材や古文献などを調査して参考資料として行った。国内に出土した鑄型の調査を行い鑄造鑄型の製作を行った。北九州にて出土した銅製品の光学的研究，分析を行い鑄造実験の参考資料とした。その結果得た新知見を考古学雑誌その他に逐次発表，刊行を行いつつある。

### 3. 美術工芸品保存箱の環境工学的研究（奨励研究A 代表者 三浦定俊）

現在使用されている保存箱の中の環境を科学的に解明することを目的とするもので、箱の内部に温湿度センサーを挿入し、外部温湿度を変化させて中の変化を記録して調べた。中での変化には外気温の変化が大きな影響を与えていて、温度が上昇すればそれによる内部の空気の相対湿度低下を防ぐために、箱を構成する木材から水分が放湿され、温度が下降した場合にはこの逆の現象がおきる。このようにして、保存箱内部は常に一定湿度に近く保たれている。二重箱では単箱に比べて外の温度変化を中へ伝えにくいので、保存箱内部はより恒温恒湿の状態に近くなり、機能的に優れていると言える。

## 4. 修復技術部

### (1) 概要

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究とその公表を主務と

する部で、保存科学部が、主に文化財の保全にかかわる科学的分析研究をつかさどる部であるのに対し、修復技術部は、老化破損し、あるいは後世の付加物のある文化財について、もとの正しい状態に修理し、あるいは復元する方法についての科学的、技術的研究を担当している。

研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料などは勿論、木造建造物の組物や細部に描かれた絵、石造構築物などに及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては、2研究室7研究員からなっている。

### 第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究とその結果の公表を主務とするが、現在は石・金属その他無機材質のものも研究対象とされている。

将来第三研究室開設が可能になった場合は、そこで無機材質の文化財の研究が行われる予定である。

### 第二修復技術研究室

紙、繊維又は皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表とを主務とする。

両研究室とも、経常的な研究として、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究や、それらを修復するための伝統技術の整理体系化と科学的裏付けの資料集積、そして更に科学的な材料、技法の修復への応用と開発のための臨床的な研究などを実施しており、とくに材質強化、補強、接合、剥落防止、朽損部充填等について各種合成樹脂の応用と技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては両研究室員による共同作業によって研究が進められている。これらの詳細は次項に記す通りである。

## 調査研究

特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究」は、昨年度から3ヶ年の継続研究として、その研究を保存科学部と分担して実施した。その成果は来年度、研究を終了した時点で、公表の予定である。

受託研究は、1 仙台市伊達政宗墓所出土副葬品の保存と修復に関する研究。2 日光社寺文化財保存の研究。3 史跡加曾利貝塚保存及び修復のための科学的研究。4 広島平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学的研究。など保存科学部と共同で行った研究のほか、5 史跡福島県羽山横穴古墳天井開口部閉塞処置に関する研究などを実施して成果を挙げた。

なお修復技術部は、昭和48年に新たに発足した部門であり、研究の基礎資料としての過去の文化財修復記録の蒐集整理が不十分であり、研究促進のかたわら、こうした記録整理を徐々に行い、3カ年を経た現在、ようやく部としての基礎固めが出来上りつつある現状である。

## (2) 研究調査活動

### A 一般研究

#### 1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

修復技術部の経常的な研究主題の一つとして、伝統技法の調査研究がある。現在は、彫刻（木彫像の木寄せ法、彩色技法、金銅仏鑄造技法）、工芸品（漆芸・木工芸技法）、絵画、書跡の装幀技法、出土金属工芸品の技法などを研究対象としている。これは作品がどのような材料を用い、どのように造られているかについての実査を混えた資料蒐集分析、過去の修理記録及び実査データに基づく、修復技術の細部の分析を行い、これに科学技術がどのように応用され得るかを明らかにしようとするものである。

##### (1) 彫刻の製作技法・修復に関する実査研究

本年度は所内での資料分析に加えて、奈良・新薬師寺の国宝薬師如来像（文化庁依頼による修理前調査）、元興寺の国宝薬師如来像、重文十一面観音像、円成寺の重文阿弥陀如来像ほか5件、元興寺極楽坊の重文弘法大師、聖徳太子像、阿弥陀如来像、大阪府・野中寺の重文銅造弥勒菩薩半跏像などの詳細な実査を行った。（西川）

##### (2) 漆芸技法の研究

本年度は奈良・当麻寺の国宝俱利伽羅龍時絵経箱を再調査したほか、科学研究費の補助を受け、実査が大幅にはかどり、漆芸品約30点を精査し資料を蒐集し得た。(中里)

(3) 出土金属工芸品の製作技法研究

本年度は奈良・石上神宮の重文禁足地出土遺品一括及び岡峯古墳出土遺物一括の実査を行い、製作技法資料を蒐集した。(青木)

(4) 装潢技法の研究

伝統技術の一つとしての装潢技法の資料蒐集と調査研究は、別項特別研究(46頁)により、特に促進されつつある。

本年度は、文化庁所蔵・重文東大寺開田図の彩色分析調査、装潢修理現場立合いと、工程資料蒐集、山形・上杉神社の重文絹本着色釈迦三尊像修理の工程記録などを行った他、文化庁主催による二つの海外展(ニューヨーク・桃山美術展、西独ケルン・書的美展)の出品物につき、文化庁に協力して現状調査を行い、保存のため、一部糊さし、繕いなどの修復処置を実施した。(増田)

2. 木造人頭標本(東大医学部蔵)の修復処置

この人頭標本は前年度から、調査と修復処置のため、当研究所に預かり、前年度は、その詳細な技法調査を行い、これが日本製であり、しかも内部墨書により寛政六年(1794)鈴木常八の製作になることを確認した。本年度は、矧目のゆるんだ木部の接着強化と、表面の彩色剥落止め処置を行うこととし、研究の結果、伝統的な漆芸技術と、合成樹脂を用いた科学技術を併用して処置することとなった。すなわち、木部接合は、内面より木屎漆で固める方法を取り、外面からはずれた木部はポリ醋酸ビニールエマルションを用いて接着固定した。彩色の欠損部には一部にマイクロバルーン混入エポキシ樹脂を充填し、そのほかはアクリルエマルションと胡粉を練ったものを充填して下塗りとし、その上に岩彩を用いて補彩した。(中里)

3. 合成樹脂による彩色剥落止め技法の研究と実施

合成樹脂による彩色剥落止めの歴史は長い、最も肝要なことは、彩色の損傷の状況に応じて合成樹脂の種類と技法が適確に選ばなければならない。そのための研究は従来から実施されてきているが、それに基づいて、本年度は、次のような処置を実施した。

(1) 房絵の絵馬展(木更津市、県立上総博物館)出陳絵馬12面の彩色剥落止



## 調査研究

P. V. A, アクリルエマルジョン AC3444, ふのりを用いての現地学芸員への技術指導を行った。(茂木)

### (2) 東京椿山荘内三重塔の天井彩色剥落止

東京芸術大学保存技術研究室が実施するに際して、現地実査及び樹脂の選択、指導を行った。(茂木)

### (3) 京都・北野天満宮の重文本殿内陣彩色保存のための調査

建築彩色は従来から使用している水溶性アクリル樹脂、アクリルエマルジョンによる剥落止めが可能であるが、板壁に厚手に硬地を施して描かれた唐獅子の画(狩野派の作品)は、漆地のふくれや剥離が目立ち、技術的にも修復の難かしいものであるので、来年度の修復実施をひかえて、樹脂の選択その他準備実験を行った。(樋口)

## 4. 木造文化財の合成樹脂による修復の研究

### (1) 人工木材に関する基礎的研究

人工木材(アラルダイト SV426)による充填接着, すなわち, 無圧縮, 無加熱で接着層が極めて厚いという条件下における被着材(木材)との接着力及び接着耐久性を圧縮剪断試験により検討した。この際, 比較試料としてレゾルシノール樹脂, フェノール及びエポキシ変性酢ビエマルジョンにそれぞれマイクロバルーンを混和したものについても試験した。なお, 老化促進処理は煮沸によった。又, SV426 自体の機械的強度を検討するために, 曲げ, 圧縮, 引張りの各試験を行った。更に, 人工木材の機械的強度, 接着力, 接着耐久性, 耐候性の向上を目的として, エポキシ系であるSV426にフェノール系であるレゾルシノール樹脂を少量ブレンドする方法を研究中であり, 接着力, 接着耐久性試験については試験を終了, ウェザーメーター及び屋外曝露による耐候性試験については試験片の作製を終えた。(西浦)

### (2) 人工木材の耐久性の調査

木造建造物材の欠損部の補填, 整形等アラルダイト SV426 が使用されるようになってから, 約10年近くになるが, この間, 各現場において必ずしも合成樹脂が正確に使用されていないらしいことを聞き, 過去に修復された主な建造物の合成樹脂の耐久性を, 岡崎市・重文伊賀八幡宮, 犬山市・国宝如庵, 法隆寺・重文羅漢堂について調査した。

伊賀八幡宮では合成樹脂による修理部分が甚だしく損傷していたが, この原因は,

アララダイト S V426 の特性を理解せずに使用したり、正体不明の合成樹脂を使用したりした結果であることが、確認された。

如庵、羅漢堂の調査では、樹脂自体の劣化による損傷は全く観察されなかったが、羅漢堂の場合、雨に濡れ、あるいは日光にさらされる柱の樹脂補足部分の古色が、退色しており、今後の人工木材の古色付けに参考になる調査ができた。(樋口、西浦)

(3) この他合成樹脂による木製品修復の実施例としては、世界救世教所蔵木額一面(木質強化のためアクリル樹脂<パラロイド B44>使用)、フィジー島博物館所蔵戦艦バウンティ号の舵(東京・東急デパート「南太平洋展」に出陳、木質強化のためイソシアネート樹脂<PSNY・10>、接着に、エポキシ樹脂を使用)などがある。(茂木)

## 5. 石造文化財の修復処置に関する研究

(1) 屋外にある石造文化財の保存は、種々困難な未解決の問題がある。本年度は文化庁の要請により、大分県下の、特別史跡・重文・熊野磨崖仏他 2 件の修復を前提とした合成樹脂の適応性確認のための調査を行った。その結果、至急処置を行う必要が認められた。表面の粉状崩壊防止には、エチルシリケート系或は他の浸透力に優れ、耐候性のある無機化合物を用いることが適当と思われた。また、亀裂、剝離に対しては、エポキシ樹脂のギャーボンズによる圧入接合法を検討し、最近このボンズの試作が完成した。また現地の風化した石材を砕き、これを各種の強化薬剤で固めたものについて耐候性試験、強度試験を実施中である。(樋口、西浦)

(2) 東京・重文旧近衛師団司令部の飾石欠失部の補足は、打継ぎ用エポキシ樹脂を併用したコンクリート擬岩による修復の一部を指導した。(樋口)

(3) 石造文化財修復の実施例としては、所沢市・熊野神社の緑泥片岩の板碑がある。これはほぼ真中から折損していたもので、ステンレス丸棒 4 本を拵とし、アララダイト CY 230 及び、その FRP などを使用して接着し、欠損部は擬岩によって修復したが、軟弱かつ重量のある石材で、接合面がうすく、また欠損を伴って密着し得ない場合の接合技術をここで開発することが出来たのは幸であった。(茂木)

## 6. 屋外露出の鉄製文化財の保存処置法の研究

屋外に露出保存されている鉄製の文化財が次第に錆びて保存状態が悪化する例は極めて多い。本年度12月に宇都宮市・清巖寺の重文鉄塔婆の保存状態を調査したが、小部分ではあるが進行性の赤錆が斑点状に広がっていた。過去に屋外露出の鉄灯籠を合

## 調査研究

成樹脂処置して保存する処置を試みたが、結果は全く失敗に終わっているので、今後は、鉄の表面の樹脂塗布による防錆は断念することとし、鉄の表面に、磷酸鉄やタンニン酸鉄の化成膜を施して防錆する研究を開始した。現在薄板鋼板の試験片を、輸入タンニン酸系防錆剤（デンソー）で処置し、錆化促進試験を行い、観察中であるが、比較的结果は良好である。清巖寺鉄塔婆の防錆には適応性があると思われる。（樋口）

### 7. 出土遺物の修復技術研究

出土遺物の保存修復については、伝統的な技法による修復方法はない。そこで考古学上遺物の調査をもとにして、その修復方法のあり方を研究するとともに、科学技術を応用した修復技術の開発を目指している。

本年度は東京国立博物館保管、京都南原古墳出土鉄器1括、石川県狐山古墳出土短甲、冑、群馬県愛宕山出土鋸など6件の鉄製遺物の処置を行い、近年開発した新技術の定着を計った。その内容は(1)表面にできるだけ艶を残さないための、特殊な防錆用アクリルエマルションによる脆弱化した鉄器の減圧含浸強化、(2)各破片の接合に最も適した接着剤の選定、(3)欠失部の程度に応じた補足、充填、整形があり、欠失面積の大きな部分には、予め厚い和紙を貼って補い、次にイソシアネート系樹脂を含浸させて、金属板のごとき硬さをもたせ、更にこの上にマイクロバルーンと樹脂の混合体で整形し、鉄錆粉末をかける所謂古色づけを行うなど、その修理対象によって少しずつ新しい工夫を加えつつある。最近ではこの科学的技術が考古学的立場と融合し、新しい修理技術として確立されつつある。なお、過去の修復記録に基づいて経年変化の調査を実施しているが、本年は群馬県観音山古墳出土遺物、重文・日光男体山山頂出土遺物等の実査を行った。（青木）

### 8. 遺跡、遺構の保存に関する研究

遺跡、遺構の保存は土の崩壊防止であり、土質強化剤として有効と思われるイソシアネート系樹脂の調査研究を行って来た。

ウレタン系（タックス）を注入して処置を行った大阪四ッ池遺跡等を実査して、その可能性について調査したが、従来の注入剤の中では浸透性がよいが、遺跡保存用としては、まだ問題が多いと思われる。

イソシアネート系（EXP）は土中で比較的軟らかく固化するので、ある場合には有効である。岩手県・上平沢遺跡焼失住居跡及び千葉県・史跡加曽利貝塚、浜松市・

史跡蜷塚の混土貝層部分に注入を試みて成果があった。またこれら貝塚の純貝層断面の崩壊防止にM・M・Aオリゴマーの注入を試みて、従来の方式と比較検討した。

遺構の取り上げ保存では、小金井市前原遺跡発見の礫焼ビットについて、イソシアネート系樹脂で土を強化後、ビット表面に和紙を水貼りし、その上に硬質ウレタンを発泡させて礫や木炭を固定、大地から切り離し、裏側の土をできるだけ除去、その部分をイソシアネートで強化後、FRPで補強して、取り除いた土のかわりにウレタンを発泡充填して取り上げ、高湿度に保った陳列ケース内で保存する試みを行った。また鹿児島県加栗山遺跡集石遺構取り上げ保存のための実査を行った。(樋口、青木)

## 9. 染織品等の保存処置の研究

### (1) 染織品自体の修復処置

現在は装幀技法を主にした伝統技法により行われているが、この従来の方法では処置し得ない程に風化、脆弱化したものに対する処置として、合成樹脂による保存処置を研究した。その一つは、仙台市片倉家に伝来した黒縮子小袖で、これは鉄媒染による絹の劣化、脆弱化が甚だしく、少しの外力によっても粉末化してしまう程である。これを水溶性アクリル樹脂、アクリル酸ブチル樹脂等による含浸強化を、美術部の田実主任研究官の協力を得ながら試験的に、一部分に施工してみたが、満足すべき結果は未だ得られず、今後も研究を続行する予定である。(樋口・増田)

### (2) 染織品保存処置

古代裂などを従来から硝子板に挟み保存することが行われていたが、これは染織品を押さえつけるし、また硝子板の間隙を大きくすると裂が固定されずに移動するので不適当なものであった。この点を改良するため、紫外線不透過性有機硝子に、シリコン樹脂の透明ゲルを塗布することにより、硝子板の間隙をかなり大きくしても、樹脂の摩擦係数が大きいので、裂が軽く面と接触するだけで、押さえつけることなしに保存可能な新方法を開発した。この方法は既に一部重要文化財の染織品の保存に用いられた。(樋口・増田)

### (3) 補絹用材料の劣化処置

われわれの着想に依って約4年前から、日本画修理用の電子線照射による絹の劣化促進の応用について、日本原子力研究所高崎研究所の協力のもとに、装幀師連盟が研究を行ってきたが、これまでにこの電子線劣化処置した絹を用いて重文5件、県指定

## 調査研究

3 件の絵画の修理がなされ、一応実用化の域に達した。しかしまだ未解決の問題もあり今後の研究を要する。(樋口, 増田)

### 10. 特史・国宝高松塚古墳壁画保存対策(保存科学部と共同研究, 関連項目32頁参照)

前年度に引き続き, 文化庁の要請により, 保存科学部と共同して高松塚古墳壁画保存に関する調査に協力した。修復技術部が担当した要項は下記の通りである。

- (1) 壁画修復のための現状記録写真撮影及び損傷状況調査(西川, 増田)
- (2) 修復作業用照明, 作業台等の設計(増田)
- (3) 盗堀口閉塞方法の検討(西川, 樋口)

## B 特別研究

軸装等の保存及び修復に関する科学的研究(昭和49年度から3カ年継続, 保存科学部との共同研究)

前年度に設定した研究テーマのうち, 本年度は下記の研究が進められた。

### 分担課題

- |   |                  |
|---|------------------|
| 伝統的な装演技術工程内容の記録   | (増田, 西川)         |
| 装演用材料の蒐集整備と, 材料に関する文献の蒐集                                      | (中里, 増田, 門倉, 茂木) |
| 各材料の電子顕微鏡及び光学顕微鏡による撮影記録(石川, 門倉)と, 強度試験(三浦, 西浦) X線回折法による測定(江本) |                  |
| 接着した材料による記録, 測定の実施  | (樋口, 見城, 石川, 増田) |
| 糊の化学分析(デンプン糊と化学糊)   | (樋口, 見城)         |
| 紙の変質と絹の劣化の科学  | (江本, 見城, 新井, 三浦) |
| 紙に含まれる Cl, pH の影響と防除  | (馬淵)             |
| 防虫, 防黴剤の材質への影響  | (新井, 森)          |
| 保存箱の科学  | (三浦)             |
| 軸装等の作品に対する適切な保存環境の設定  | (西川, 石川, 三浦)     |
| 抄き嵌め技法の和紙への応用   | (増田)             |

いずれも来年度の最終整理へ向けて順調に進行している。テストピース用和紙は整理収納されて, 新規標本入手とともに, その点数は約250点, 25種類となった。装演技術の工程記録は, カード化が進められており, スライド, 8ミリ映画による標準

的な全工程記録も造られた。前年度、装潢アトリエも整備されたので、紙の接着見本作成も可能となり、紙の粘弾性測定も、単体から二枚の紙を貼り合わせたものへと進行し、走査型電子顕微鏡による紙の撮影も、30点150枚を終えた。紙に含まれる塩素については放射化分析の測定を終了している。また紙本の破れや虫穴修理のための漉紙の技法の応用については、試作1号機が完成し、テストの結果、得られた資料によって、改良点も明確になってきている。

### C 受託研究

#### 1. 仙台市伊達政宗墓所出土副葬品の保存と修復に関する研究（保存科学部と共同研究、37頁参照）

昨年度発掘調査された伊達政宗墓所から出土した副葬品のうち、特に材質朽損の甚しい漆芸品8点を対象として、その保存方法と修復処置法の研究を行ったものである。長年、高湿度（RH92%）の石室内に置かれていたために、木質部は殆んど腐朽し漆膜のみで概形をとどめている。

X線透視の結果、木部の残存する所もあるが、すでに収縮し、縦横の大きな亀裂が入っており、急速な乾燥は危険であると判断された。

現在、密封したアクリルケースに納め、ゼオライトによる調湿（RH90%）を行い、更に厚い木箱に入れて、シーズニングを行っており、定期的に温湿度を測定し、変形などについては肉眼で観察している。また一方、この種の漆芸品修復法の実験検討も行つた。

将来、除々に湿度を下げて行き、変形、破損の危険が生じなければ、修復可能な状態にまで乾燥させて行く予定であるが、現状ではやや湿度の下った所で、漆膜に歪みや反りかえりを生じているものもあるので、来年度、場合によっては一部修復処置を実施することになるかと思われる。（西川、中里、石川、三浦）

#### 2. 国宝・重文日光社寺文化財保存の研究（保存科学部と共同研究、36頁参照）

新旧彩色の現状保存状況調査（西川、中里）

#### 3. 史跡加曽利貝塚保存及び修復のための科学研究（保存科学部と共同研究、36頁参照）

遺構保存のための合成樹脂による実験施工（樋口、青木、西浦、茂木）

## 調査研究

### 4. 広島市平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学研究（保存科学部と共同研究、37頁参照）

原爆被爆資料の保存の方法につき、49年度、依頼による実査、指導を行って、陳列環境も改善され、陳列替え計画も確立された。本年度は(1)劣化した紙製品の保存処置法の研究、(2)不活性なガス封入などによる保存ケース内環境保持法の研究、(3)黒い雨の痕跡の材質分析と保存法の研究を実施した。(1)については、パルプ紙の修理法であるので、欧米でさかんに行われている合成樹脂によるラミネーション法を応用することの基礎実験を行い、特に湿式ラミネーション法による検討を行った。(2)については、アクリル樹脂製の陳列用ケース内に窒素を流し、繊維製品の劣化を防ごうとする実験を行っている。いずれも来年度、結論が出される予定である。(3)は、黒い雨の試料を採集し、定性試験（酸への溶解性試験、加熱試験）を行った結果、主成分は炭素であることが確認され、特に処置を行わなくとも、そのまま保存出来ることが明らかとなった。なお、この試料で放射能の残存度試験も行ったが、極めて僅少で、検出器の検出限界以下であった。（西川、樋口、増田、江本、馬淵、見城）

### 5. 福島県原町市・史跡羽山装飾横穴天井開口部閉塞修復処置に関する研究

羽山古墳は装飾横穴で、宅地造成中のブルドーザーが、その天井部分を破壊したことによって発見された。天井が破壊されたために密閉状態が破れ、横穴古墳保存に重要な湿度の安定を欠く状態になり、玄室内部の装飾顔料や壁面の乾燥による剝離が懸念された。

本年度の国庫補助事業として保存施設設置工事が行われることになり、その工事の一部として、天井の開口部閉塞方法の研究と実施を行ったものである。閉塞材料は、気密性と断熱性に富み、軽くて丈夫な硬質ウレタンを使用することになり、施工実験の結果、まず開口部にステンレス金網を貼り、それをFRPで補強し、その上に硬質ウレタン（現場発泡）を用いて閉塞した。玄室内に見える金網には、エポキシ樹脂エマulsionで、周囲の土質感とあうような擬岩を作り修復した。（樋口、青木、茂木）

## D 科学研究費

### 1. 平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究（一般研究D 代表者 中里寿克）

素地としての埴・漆皮・紙胎、装飾としての平文・螺鈿・蒔絵について調査を行った。平文螺鈿については時代を遡らせて白鶴美術館その他の平文螺鈿鏡8面、重文・

螺鈿玳瑁合子（当麻寺），重文・螺鈿鞍3背（東博他），重文・螺鈿卓2基（東大寺他）等を調査し，国宝・海賦蒔絵袈裟箱（東寺），国宝・片輪車蒔絵手箱（東博），国宝・梅蒔絵手箱（三島大社），国宝・秋野鹿蒔絵手箱（出雲大社），重文・竜胆丸文蒔絵礼盤（東博）等についてはX線透視撮影を実施し，技法の細部について検討した。

## 2. エアブラッシュ装置を用いた出土金属製品のクリーニングの研究（奨励研究

### A 代表者 青木繁夫

出土金属製品は，錆や緑青で表面が隠されているため，象嵌等の文様や遺物の形状が判然としないものがかかなりあり，金属製品研究のうに支障があった。

従来は歯科用グラインダー等を利用してはいたが新しい試みとして，窒素ガスの噴射流中に微粒子パウダーを混入してクリーニングを行う方法の実験を行い，その有効性が確認されたので，群馬県観音山古墳出土大刀，静岡県正勝山古墳出土頭椎柄頭の銀象嵌の露出を行った。

## 5. 主要研究業績

①：著書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表  
⑤：講演・放送 ⑥：その他  
昭和50. 4～昭和51. 3

### 美術部

#### 岡 畏三郎（美術部長）

- ① 「高橋コレクション」（第1巻，第2巻，第5巻）（共同編集，解説）

中央公論社 50. 6～12

#### 久野 健（第一研究室長）

- |                  |                |           |
|------------------|----------------|-----------|
| ① 仏像事典           | 東京堂            | 50. 8     |
| ① 石仏             | 小学館            | 50. 12    |
| ② 曹洞宗寺院伝来の仏像     | 曹洞宗宗務所         | 50. 10    |
| ② 飛鳥大仏論 上        | 美術研究           | 300 51. 1 |
| ② “ 下            | “              | 301 51. 2 |
| ③ 鎌倉彫刻随想         | 博物館ニュース        | 50. 10    |
| ③ 鎌倉時代の彫刻 解説     | 東京国立博物館鎌倉彫刻展目録 | 50. 10    |
| ④ 飛鳥寺本尊釈迦如来像について | 美術部研究会         | 50. 5     |



## 調査研究

- ④ 飛鳥時代の金銅仏 文化庁重要文化資料選定協議会 50. 7

田村 悦子（主任研究官）

- ④ 藤原行成について 文化庁重要文化資料選定協議会 50. 7

柳沢 孝（主任研究官）

- ② 真言八祖行状図と魔寺永久寺真言堂障子絵(→) 美術研究300 51. 1

- ② “ (二) “ 302 51. 3

- ④ 西大寺十二天の製作年代に関する問題

文化庁重要文化資料選定協議会 50. 7

猪川 和子（主任研究官）

- ① 日本古彫刻史論 講談社 50.11

- ② 平安朝仏師の歌の落書 朝日新聞 50.4.12

- ③ 日本美術史 回顧と展望（古代） 史学雑誌84-5 50. 5

- ③ 仏像事典 解説 東京堂 50. 8

- ③ 鎌倉時代の彫刻 解説 東京国立博物館鎌倉彫刻展目録 50.10

- ⑤ 藤原時代の彫刻 国立社会教育研修所 50. 8

- ⑤ 関東の鉄仏について 東京都文化会館大会議室 51. 3

田実 栄子（主任研究官）

- ① 日本の染織（山辺知行共著） 毎日新聞社 50. 8

- ① 型染 芸艸堂 50.12

- ③ 伝上杉謙信所用「金銀襦袢子等縫合胴服」 国華982 50. 8

- ④ 和歌山・東照宮の服飾類について 美術史学会大会 50. 5

- ④ 近世初期の型染について 文化庁重要文化資料選定協議会 50. 7

宮 次男（主任研究官）

- ① 肖像画 小学館 50. 5

- ① 金字塔曼陀羅 吉川弘文館 51. 3

美術部

- ② 「平治物語絵巻」について 「平治物語絵巻解説」講談社 50. 7
- ② 東寺本弘法大師行状絵巻 一特に第十一巻第一段の成立をめぐる一  
美術研究299 50.11
- ② 平治物語絵巻の絵画史的考察 「新修日本絵巻物全集」10 角川書店 50.11
- ② 扇面写経の装飾美 大法輪42-12 50.12
- ④ 東寺本弘法大師行状絵巻第十一巻と「東宝記」 美術史学会大会 50. 5

関口 正之（第一研究室）

- ③ 白描画から水墨画への展開（「水墨美術大系」I）図版解説 講談社 50.12
- ④ 西大寺の十二天画像 文化庁重要文化資料選定協議会 50. 7

中村伝三郎（第二研究室長）

- ① 岡田三郎助・小糸源太郎（浅野徹共著）「現代日本の美術」7 集英社 50. 5
- ③ 茨城県秀作美術展に寄せて 同県立県民文化センター・同展目録 51. 3
- ⑤ 日展の彫塑について 東京都美術館 50.11

関 千代（主任研究官）

- ③ 西遊記画卷（前田青邨筆） 便利堂 50. 7
- ③ 前田青邨筆「三浦大介」ほか 武道 50.1~3

陰里 鉄郎（第二研究室）

- ① 萬鉄五郎 「近代の美術」29 至文堂 50. 7
- ① 黒田清輝 「日本の名画」5 中央公論社 50.11
- ② 新出の川原慶賀筆「西洋人物図」 蘭研研究報告 296 50. 7
- ② 古賀春江の世界 みづゑ 851 51. 2
- ② 川原慶賀を中心に  
シーボルト・コレクションを中心とした浮世絵展目録 51. 3
- ② 不同舎のこと 佐賀県立博物館・三根霞郷展目録 51. 3
- ③ 川原慶賀筆西洋人物図 古美術48 50. 5

## 調査研究

- ⑤ 黒田清輝（美を求めて） NETテレビ 50. 9  
 ⑤ 長崎と洋風画 開所記念講演会 50.12  
 ⑥ 晩年の青木繁 本の手帖Ⅻ 50. 7

### 川上 涇（資料室長）

- ① 大阪市立美術館収蔵中国絵画（鶴田武良共編） 朝日新聞社 50. 5

### 上野 アキ（主任研究官）

- ③ 世界美術小辞典 東洋編 中央アジア 芸術新潮304 50. 4

### 江上 綏（資料室）

- ② 神光院蔵紫紙銀字心経荘厳画の山水表現 美術研究301 51. 2

### 鶴田 武良（資料室）

- ① 大阪市立美術館収蔵中国絵画（川上涇共編） 朝日新聞社 50. 5  
 ① 八大山人・揚州八怪（米沢嘉圃共著） 講談社 50. 5  
 ⑤ 清代揚州派の絵画 黒川古文化研究所 50. 5

### 河野 元昭（資料室）

- ② 探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画 上 美術研究298 50. 3  
 ② " 下 " 299 50.11  
 ② 渡辺華山一写生から心象表現への旅―「渡辺華山遺墨帖」歴史図書社 50. 5  
 ② 徳禅寺の狩野探幽筆障壁画 日本美術工芸441 50. 6  
 ② 光琳水墨画の展開と源泉 「水墨美術大系」10 講談社 50.10  
 ② 探幽筆日光東照宮陽明門雲竜図天井画について 上 美術研究301 51. 2  
 ② " 下 " 302 51. 3  
 ② 関東南画の成立と展開 「水墨美術大系」別巻1 講談社 51. 2  
 ② 結城・下館時代の燕村画 「鑑賞日本古典文学」32 角川書店 51. 3  
 ③ 谷文晁筆松島眺望図 国華979 50. 4

美術部・芸能部

- ④ 狩野探幽の写生 美術史学会全国大会 50. 5  
 ④ 光琳筆波濤図屏風を中心にして 美術史学会東京支部例会 50.12  
 ④ 在米琳派所感 美術部研究会 51. 2  
 ⑥ 日本における歴史学の発達と現状IV  
 国際歴史学会議日本国内委員会 51. 3

米倉 迪夫(資料室)

- ③ 佐竹本三十六歌仙「頼基」,「遊行上人縁起絵」断簡 解説  
 遠山記念館蔵品図録 50.10

芸 能 部

横道萬里雄(芸能部長)

- ② 江口・平調返 鎮仙 50. 1  
 ⑤ 能楽講座 銀座能楽堂 50.4~5  
 ⑤ 能の舞蹈と演技 朝日カルチャーセンター 50. 9  
 ⑤ 能 豊島区公会堂 50.10~11  
 ⑤ 能の演出 能楽懇談会 50.11  
 ⑤ 雅楽「東遊」と能「羽衣」 銀座能楽堂 51. 1  
 ⑤ 修二会の小道具 毎日放送 51. 2

羽田 昶(演劇研究室)

- ② 狂言と連歌・覚書 「華泉」24号 50. 4  
 ② 能「安宅」の演出 「演劇界」8月号 50. 8  
 ② 能の作者考定をめぐる(喜多流・声の名曲集「野宮」所収)  
 筑摩書房 50.10  
 ③ 喜多流声の名曲集・曲目解説 筑摩書房 50.4~51.3

柿木 吾郎(音楽舞蹈研究室長)

- ② 琵琶音楽と九州 宮崎県研修センター 50. 7

## 調査研究

- ② 民謡に残る日本人の起源 読売新聞 51. 2
- ⑤ 能の民族的音楽性 銀座能楽堂 50. 4
- ⑤ 日本人の音感 日経ホール 50. 7
- ⑤ 南九州の民謡 開所記念講演会 50.12

### 佐藤 道子（音楽舞蹈研究室）

- ① 東大寺修二会の構成と所作 芸能の科学 6 50. 6
- ⑤ 修二会の小道具 毎日放送テレビ 51. 2

### 松本 雍（音楽舞蹈研究室）

- ② 日本音楽の歴史をたどる—中世編(1)(2)—(横道萬里雄共著)  
季刊邦楽 5号・6号 50.10~51.1
- ③ 上演狂言解説 能楽鑑賞の栞10~12号 50.5~11
- ⑤ 「江口」の平調返 能楽タイムズ 51. 3

### 三隅 治雄（郷土芸能研究室長）

- ① 日本祭礼地図Ⅰ 春季篇（和歌森太郎・榎本由喜雄・田原久・原浩一・  
大木忠共著） 国土地理協会 51. 3
- ② 沖縄における男芸と女芸 南島史学 7号 50.11
- ② 沖縄芸能の伝承基盤 「沖縄—自然・文化・社会—」 51. 2
- ② 春迎えの習俗と芸能 「芸能論纂」 51. 3
- ② 民俗仮面前史 「能のおもて」 51. 3
- ② 民謡と芸能 「日本民謡全集」第1巻 51. 3
- ③ 綾渡の盆踊 「民俗芸能」56号 50.10
- ③ これからの民俗芸能の保存 「文部時報」1179号 50. 8
- ④ 房総の念仏芸能 房総文化研究会 50.12
- ⑤ 民俗芸能の歴史と保存について 長野県教委文化財講習会 51. 2
- ⑥ レコード「総集篇 沖縄の音楽」（編集解説） 日本コロムビア 50.11

### 仲井幸二郎（郷土芸能研究室）

芸能部・保存科学部

- ② 源氏物語と催馬楽 鑑賞日本古典文学講座第4巻 50. 5
- ③ 折口信夫『かぶき讃』ほか 演劇界5月号 50. 5
- ③ 風土と芸能(東京都) 日本民謡全集第3巻 50. 9
- ③ 民謡用語解説 日本民謡全集第5巻 50.12
- ④ 共同研究「山家鳥虫歌」 芸能 50.7~51.3
- ⑤ 童唄の周辺 目黒区青年大学 50.10

保存科学部

江本 義理(保存科学部長)

- ② 岩内山遺跡出土飛禽文鏡の材質調査 北陸縦貫道関係遺跡調査報告9 51. 3
- ② Technical studies on the painting of the newly found tomb  
Takamatsuzuka in Central Japan (山崎一雄共著)  
Bulletin de l' Institut royal du Patrimoine artistique t. XV-1975 50.
- ④ 石造品などの変壊生成物 日本学術振興会希元素調査第121委員会 50. 4
- ④ 考古遺物の埋蔵および保存環境における変質現象と保存  
考古学のための自然科学研究会 51. 1
- ⑤ 装飾古墳壁画の保存 開所記念講演会 50.12
- ⑤ 分析化学と文化財 日本分析化学会関東支部創立20周年記念会 50.12
- ⑤ 保存科学概論 50年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修 51. 1

馬淵 久夫(化学研究室長)

- ① 新実験化学講座第7巻 核・放射線〔I〕・〔II〕(編集) 丸善 50.11~12
- ② The samarium-neodymium chronology of chondrites (野津憲治共著)  
Geochemical Journal Vol. 9 50. 7

見城 敏子(化学研究室)

- ② 漆塗膜に関する研究(第5報)〔漆塗膜の硬化に及ぼす不飽和脂肪酸  
メチルエステルの影響〕 色材協会誌 50.10
- ② スエーデン土俗博物館所蔵影絵の赤外吸収スペクトルの分析

## 調査研究

- 古文化財の科学第19号 50. 12
- ② 漆工品保存への科学的アプローチ 考古学雑誌61巻2号 50. 12
- ② 漆塗膜の硬化に及ぼすpHの影響 保存科学15号 51. 3
- ② 岩内山遺跡出土木片の赤外吸収スペクトル分析  
北陸縦貫道関係遺跡調査報告9 50. 3
- ③ 環境保存の手引(登石健三共著) 博物館学雑誌1巻1号 50. 8
- ③ 文化財の保存 蟻塔21巻12号 50. 12

### 門倉 武夫(化学研究室)

- ② 残留燻蒸ガスの無害廃棄法開発 古文化財の科学第19号 50. 12

### 石川 陸郎(物理研究室)

- ② 岩内山遺跡出土飛禽文鏡のX線透視  
北陸縦貫道関係遺跡調査報告9 50. 3
- ② 酸化還元電位及びpHの測定 " "
- ② 重要文化財根津神社楼門のX線透視調査と防腐防虫対策(三浦定俊・  
新井英夫・森八郎共著) 保存科学15号 51. 3

### 三浦 定俊(物理研究室)

- ② 水浸木材の超音波物性 保存科学15号 51. 3
- ② 重要文化財根津神社楼門のX線透視調査と防腐防虫対策(石川陸郎・  
新井英夫・森八郎共著) 保存科学15号 51. 3

### 新井 英夫(生物研究室)

- ② 斯道文庫など書庫で採集された昆虫と書籍害虫およびその食痕虫糞な  
らびに防除対策(森八郎共著) 慶大日吉論文集12 50. 4
- ② 減圧時の燻蒸条件(森八郎共著) 古文化財の科学第19号 50. 12
- ② 重要文化財根津神社楼門のX線透視調査と防腐防虫対策(石川陸郎・  
三浦定俊・森八郎共著) 保存科学15号 51. 3
- ⑤ 古墳の微生物学的問題 古文化財科学研究会例会 50. 7

森 八郎（生物研究室）

- ② 斯道文庫など書庫で採集された昆虫と書籍害虫およびその食痕・虫糞  
ならびに防除対策（新井英夫共著） 慶大日吉論文集12 50. 4
- ② 文化財害虫のリストと虫害に対する保存科学 古文化財の科学第19号 50. 12
- ② 滅菌時の燻蒸条件（新井英夫共著） 古文化財の科学第19号 50. 12
- ② 文化財と甲虫類 三田評論 51. 2
- ② 重要文化財根津神社楼門のX線透視調査と防腐防虫対策（石川陸部，三浦  
定俊，新井英夫共著） 保存科学15号 51. 3
- ④ 博物館施設・展示資料などの虫害に対する保存科学  
全日本博物館学会大会 50. 8
- ④ 古文化財の虫害に対する保存科学 考古学のための自然科学研究会 51. 1
- ⑤ シロアリ燻蒸実務講習会講演 日本しろあり対策協会講習会 50. 9
- ⑤ 建築物の虫害 シロあり対策ゼミナール（日本しろあり対策協会） 50. 9
- ⑤ わが国における最近のシロアリ分布（第4報） 日本昆虫学会大会 50. 9

修復技術部

西川杏太郎（修復技術部長）

- ② 美術館・博物館建築への提言 全建ジャーナル161号 50. 5
- ② 金銅押出仏の修復処置—三重県津市愛宕山古墳出土—（青木繁夫共著）  
保存科学15号 51. 3
- ④ 現代の集成材と古代彫刻の木寄せについて 古文化財科学研究会 50. 8
- ⑤ みんなの科学「古代発掘」 NHK TV 50. 10
- ⑤ 梱包と輸送 文化庁指定文化財取扱講習会 51. 1
- ⑤ 破損と修理 ” 51. 1

中里 寿克（第一修復技術研究室）

- ② 和歌山県田辺市高尾山経塚出土の「胡蝶蒔絵鏡宮」  
MUSEUM 297号 50. 12
- ② 乾漆製伎楽面の製作技法—主に東大寺伎楽面について—



調査研究

- ② 平安時代漆芸技法資料Ⅴ 仏教芸術 106号 51. 3  
④ 乾漆伎楽面の製作技法について 保存科学15号 51. 3  
美術史学会例会 50. 9

青木 繁夫（第一修復技術研究室）

- ② 金銅押出仏の修復処置—三重県津市愛宕山古墳出土—（西川杏太郎共著）  
保存科学15号 51. 3  
② 松本市桜ヶ丘古墳出土天冠の修復処置 “ 51. 3  
② 遺構の取り上げ保存（樋口清治共著） “ 51. 3  
⑤ みんなの科学「古代発掘」 NHK TV 50.10

西浦 忠輝（第1修復技術研究室）

- ② 文化財修復における人工木材に関する研究〔Ⅰ〕 所内報告 50.10  
② 文化財修復における人工木材に関する研究〔Ⅱ〕 所内報告 51. 1

茂木 曙（第一修復技術研究室）

- ② 「太鼓時計」の彩色剥落どめについて 保存科学15号 51. 3

樋口 清治（第二修復技術研究室長）

- ② 重要文化財名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置（増田勝彦共著）  
保存科学15号 51. 3  
② 遺構の取り上げ保存（青木繁夫共著） 保存科学15号 51. 3  
⑤ 出土遺物の保存と合成樹脂 九州歴史資料館 50. 7  
⑤ 考古学における遺構と出土遺物の保存処置 小金井市教育委員会 50.11  
⑤ 保存材料要説 50年度埋蔵文化財発掘技術専門研修 51. 1

増田 勝彦（第二修復技術研究室）

- ② 重要文化財名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置の研究（樋口清治共著）  
保存科学15号 51. 3

## 6. その他の研究活動

## ほかの機関における講義

(氏名)	(機 関 名)	(期 間)	(担当科目)
川上 涇	愛知県立芸術大学非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	東洋美術史
〃	青山学院大学文学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	〃
久野 健	東京大学文学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	美術史学
田村 悦子	青山学院大学非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	美術
柳沢 孝	東北大学文学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	東洋・日本美術史
猪川 和子	帝京大学文学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	日本美術史
田実 栄子	お茶の水女子大学家政学部非常勤講師	(50. 4. 1～50. 10. 20)	服飾史
宮 次男	青山学院大学非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	美術
江上 綏	埼玉大学教養学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	日本の芸術
関口 正之	千葉工業大学非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	文芸学
鶴田 武良	成蹊大学経済学部文学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	美術
河野 元昭	東海大学教養学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	外書研究, 特論
〃	静岡大学教養学部非常勤講師	(50. 12. 6～51. 1. 31)	日本美術史
横道萬里雄	東京芸術大学音楽学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	日本音楽史
佐藤 道子	フェリス学院大学非常勤講師	(50. 4. 19～51. 3. 31)	国文学
江本 義理	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	保存科学
西川杏太郎	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(50. 4. 1～51. 3. 31)	修復技術史

## Ⅵ 事 業

### 1 出 版

#### (1) 美 術 研 究

昭和7年1月創刊，当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌であつて，主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し，ときには所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版，各号本文40頁，原色図版1，単色図版8，各年度6冊刊行している。ただし本年度は出版費不足のため4冊を刊行した。

昭和50年度（第299号～第302号）「美術研究」所載の論文等の題目は次のとおりである。

美術研究 299号 昭和50年5月 編集

#### <論文>

東寺本弘法大師行状絵巻

一特に第十一巻第一段の成立をめぐる一

宮 次男

#### <論文>

探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画 下

河野 元昭

#### <図版解説>

高橋由一筆 日蓮上人像

隈元 謙次郎

美術研究 300号 昭和50年7月 編集

#### <論文>

飛鳥大仏論（上）

久野 健

#### <論文>

真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵（一）

柳沢 孝

美術研究 301号 昭和50年9月 編集

#### <論文>

神光院蔵紫紙銀字心経莊嚴画の山水表現

江上 綏

#### <論文>

飛鳥大仏論（下）

久野 健

<論文>

探幽筆陽明門雲竜図天井画について（上）

河野 元昭

美術研究 302号 昭和50年11月 編集

<論文>

探幽筆陽明門雲竜図天井画について（下）

河野 元昭

<論文>

真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵（二）

柳沢 孝

## （2）日本美術年鑑

昭和11年10月創刊以来、毎年1冊（ただし昭和19年～21年版と昭和22～26年版は合冊として各1冊）出版してきたが、昭和49年版は諸事情により刊行が延期されていた。昭和51年3月、未刊の昭和49年版を昭和50年版と合わせて1冊として刊行出版した。内容は、昭和48、49年（各1月～12月）の2年間にわたるわが国の美術界の活動状況を記録したもので、美術界年史、主要展覧会、定期刊行物・単行図書的美術文献目録、物故者略歴を収録している。資料収集と調査、執筆は所内研究員による。

## （3）金字宝塔曼陀羅

本書は、現存する金字宝塔曼陀羅三本<中尊寺藏金光明最勝王經金字宝塔曼陀羅、談山神社藏法華曼陀羅、立本寺藏妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅>のすべてを図版（原色10図、単色205図）と研究論文（154頁）によって構成した学術研究図書（A4判）で、昭和50年度文部省科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて吉川弘文館から51年3月に出版した。図版に用いた写真はすべて本研究所において撮影した原板によって製版し、論文は美術部宮次男の執筆によるものである。

## （4）芸能の科学

芸能の科学 6（芸能調査録Ⅰ）

過去10年にわたって、芸能部が継続的に行った「東大寺修二会」に関する研究調査の成果の一部を、「東大寺修二会の構成と所作（上）」と題して昭和50年6月に刊行した。

## 事業

毎年2月末から一カ月近い日数を費して、大規模な構成と多彩な内容を展開する“東大寺修二会”の現状を、客観的に把握し、学術的な見地から再構成・記録したもので、今後の修二会研究の基礎資料となるものである。220コマの写真と、50余の図をも用いて、行事の内容を可能な限り細かく記述した。

(上)の巻には、修二会行法の基本となる<sup>しよや</sup>初夜の勤行と、<sup>ごんぎよう</sup>法華懺法・<sup>はつげきんげう</sup>半夜の勤行を収めてある。

## (5) 保存科学

昭和39年3月創刊の保存科学部、修復技術部の機関誌で、年1回の刊行で今までに第14号まで発行、内容は所属研究員の文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文、報告等である。

保存科学第15号 昭和51年3月発行

漆塗膜の硬化におよぼす pH の影響	見城 敏子
国宝及び重要古文化財建造物の部材	江本 義数
水浸木材の超音波物性	三浦 定俊
重要文化財根津神社楼門の X 線透視調査と防霉・防虫対策	石川陸郎・三浦定俊・新井英夫・森 八郎

重要文化財名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置の研究

受託研究報告第38号	樋口清治・増田勝彦
------------	-----------

金銅押出仏の修復処置 一三重県津市愛宕山古墳出土一

受託研究報告第39号	青木繁夫・西川杏太郎
------------	------------

松本市桜ヶ丘古墳出土天冠の修復処置

受託研究報告第40号	青木 繁夫
------------	-------

平安時代漆芸技法資料 V — 仏功德時絵経箱・蓮唐草蒔絵経箱 —	中里 寿克
----------------------------------	-------

「大鼓時計」の彩色剥落どめについて	茂木 曙
-------------------	------

遺構の取り上げ保存	樋口清治・青木繁夫
-----------	-----------

〔研究速報〕

流嵌機の和紙修理への応用	増田 勝彦
--------------	-------

## (6) その他の出版物

### 美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和7
吉備大臣入唐絵詞	(美術研究資料第2輯)	昭和9
徽宗摹張萱搗練図	(美術研究資料第3輯)	昭和10
鳳凰堂雲中供養仏	(美術研究資料第4輯)	昭和11
桃山時代金碧障壁画	(美術研究資料第5輯)	昭和12
富貴寺壁画	(美術研究資料第6輯)	昭和13
印度及南部アジア美術資料	(美術研究資料第7輯)	昭和14
光悦色紙帖	(美術研究資料第8輯)	昭和14
菱田春草	(美術研究資料第9輯)	昭和15
能恵法師絵詞	(美術研究資料第10輯)	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	(美術研究資料第11輯)	昭和16
日本美術資料	第1輯	昭和13
日本美術資料	第2輯	昭和14
日本美術資料	第3輯	昭和15
日本美術資料	第4輯	昭和16
日本美術資料	第5輯	昭和17
近代日本美術資料	第1輯	昭和23
近代日本美術資料	第2輯	昭和24
近代日本美術資料	第3輯	昭和26
墨跡資料集	第1輯	昭和24
墨跡資料集	第2輯	昭和24
墨跡資料集	第3輯	昭和26
源氏物語絵巻		昭和24
黒田清輝素描集		昭和24
柴山寺八角堂		昭和25
柴山寺八角堂の研究		昭和26

## 事 業

法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		昭和28
黒田清輝作品集		昭和29
高雄曼荼羅		昭和41
明治美術基礎資料集		昭和50
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	昭和16
東洋美術文献目録続編	昭和11年～同20年	昭和23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	昭和29
美術研究索引	第1号～第100号	昭和16
美術研究総目録	第1号～第230号	昭和40
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで（再刊）	昭和42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	昭和44

ほかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

### 光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編 便利堂	昭和32
醍醐寺五重塔の壁画	高田 修編 吉川弘文館	昭和34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著 吉川弘文館	昭和39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著 大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝	隈元謙次郎著 日本経済新聞社	昭和41
扇面法華經	秋山光和 柳沢 孝著 鈴木敬三 鹿島出版会	昭和47

## 芸 能 部

標準日本舞踊譜		昭和35
音盤目録Ⅰ		昭和40
芸能の科学 1	—芸能資料集 1—四世鶴屋南北作者年表	昭和41
芸能の科学 2	—芸能資料集 2—鮫の神楽台本集成	昭和41
音盤目録Ⅱ		昭和45

東大寺二月堂 観音悔過（お水取り）

東京国立文化財研究所芸能部監修      ビクターレコード      昭和47

芸能の科学 3 一 芸能論考 1

東京国立文化財研究所芸能部編      平凡社      昭和47

芸能の科学 4 一 芸能資料集 3

東京国立文化財研究所芸能部編      平凡社      昭和48

芸能の科学 5 一 芸能論考 2

東京国立文化財研究所芸能部編      平凡社      昭和49

### 保存科学部（受託研究報告）

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剥落どめ他18件      昭和35～昭和42

## 2 開所記念行事

### 開所記念講演会

日 時    昭和50年12月6日（土）      13：30～16：00

会 場    東京国立博物館講堂

テーマ   九州の文化財

講 演   (1)長崎と洋風画      (陰里鉄郎)

          (2)南九州の民謡      (柿木吾郎)

          (3)装飾古墳壁画の保存（江本義理）

#### (1) 長崎と洋風画

江戸期長崎絵画は二つの源泉をもっている。第一は開港以前からの南蛮美術（第一次洋風画）の伝統、第二は 中国画僧の渡来である。前者は 遺品をたどることが難しい。後者は黄檗画派を生み出した。続いて、唯一の開港地としての特殊な政治的社会的都市環境から写実的作風を必要とする職業画派（唐絵目利派）が形成されてくる。洋風表現は、発生当初から僅かながら見出されるが、洋風画と呼ばれうる作品の出現は、寛政年間（1789～1900）以降である。そして、洋風画家の多くは長崎画派の正史



## 事 業

的記録にその名をとどめていない。そのことは長崎洋風画派の発生とその位置を暗示する。外国文化との直接的接触によってほとんど自然発生的に生じ出したこと、理論的裏付けやその志向を有していないこと、銅版画を創り出していないこと、蘭号をもつ画家のいないことなどが、長崎洋風画派の知的状況と芸術的性格を示唆している。(陰里鉄郎)

### (2) 南九州の民謡

本州の民謡の音楽的構造を調べると4度音程がその骨格をなしていることが分る。ところが薩南諸島の民謡では3度音程が幾つか重った骨格になっており、このことが民謡の独特な味わいとなっている。鹿児島県の「おはら節」は南方系の3度型と本州系の4度型との混合型を示し、宮崎県の「刈干切唄」は南方系の性格が強い。このような骨格の歌は福岡県の山中にも「稗搦唄」として残っている。

これらの事実から、南九州の民謡は蒙古的なニュアンスの強い4度系と南方的3度系との接点の北限であることが明らかである。当日は多くの音楽を録音で示し、楽譜で分析を行いながら眼と耳で確かめつつ、南九州の民謡の音楽文化財としての特性を味わった。また分析結果のマッピングも資料として配布された。(柿木吾郎)

### (3) 装飾古墳壁画の保存

九州の装飾古墳は、5世紀後半にまづ彫刻しやすい軟い阿蘇熔岩を用いて、石棺や石障に浮彫り、線刻した装飾を施したものが出現した。6世紀に入って、主として安山岩、花崗岩を石組みとした横穴式石室古墳が北九州からおこり、周壁に彩色を施した壁画系装飾古墳が発生した。

彩色顔料は、赤、白、緑、青、黒の有色粘土質の顔料が用いられている。

壁画の保存状況、石材の風化、破損、目地の粘土の欠落により石組みのゆりみ、彩色の磨耗・剝落、顔料の変色・汚損、変質生成物の析出、微生物、藻類等による汚損を受けており、早急に対策を講ずべき状況にある。

保存対策。1. 石室内環境を把握して温湿度の安定保持。2. 積石の補強。3. 彩色層の固定。4. 微生物劣化の防除。以上の項目を総合的に検討し、密閉保存の原則で各古墳、個々に対策を樹てている。(江本義理)

### 3 会 議

#### 美術部・保存科学部・修復技術部

##### 昭和50年度重要文化資料選定協議会

本年度の当該協議会は本研究所を当番機関とし、文化庁文化財保護部担当官及び附属機関所属の技官 120 名の参加を得て、下記の日程と報告者により行い、大きな成果を得た。

7月3日 14:00～17:00

案内説明

江本義理・西川杏太郎

7月4日 10:00～12:00

(絵画) 西大寺の十二天

柳沢 孝・関口正之

(彫刻) 飛鳥大仏の諸問題

久野 健

(考古) 出土品の修復について

西川杏太郎・樋口清治・青木繁夫

7月4日 14:00～17:00

(書跡) 藤原行成筆御物文書について

田村 悦子

(工芸) 近世初期の型染について

田実 栄子

(建築) 阿弥陀堂建築について

工藤 圭章

7月5日 10:00～12:00

総 会

#### 保存科学部・修復技術部

##### 第5回文化財保存修復研究協議会

昭和50年10月9日(木) 10:00～17:00

当研究所別館会議室にて

今年度は前年度に引き続き同じテーマをかかげ「木造文化財の保存と修復」の2回目として研究発表及び協議を行った。出席者は文化財鑑査官、記念物課担当技官、建造物課長及び担当技官、美術工芸課担当技官、東京国立博物館工芸課・考古課、東京芸術大学その他関係の専門家の出席を得、更に本年度は特に奈良国立文化財研究所、元興寺仏教民俗資料研究所、美術院国宝修理所より専門家7氏を招聘し活発な討論を行

## 事業

った。

(報告者)

- |                         |       |
|-------------------------|-------|
| 1. 木造工芸品の修理方針と問題点       | 郷家 忠臣 |
| 2. 建造物修理における部材の取り替えについて | 服部 文雄 |
| 3. 水浸木材の処理 ミュレタラー著書紹介   | 青木 繁夫 |
| 4. PEGによる古材の保存とその問題点    | 沢田 正昭 |
| 5. 出土木製品保存の現状と今後の課題     | 水野 正好 |

### 第6回文化財保存科学懇談会

昭和51年3月4日(木) 10:00~17:00

当研究所別館会議室にて

文化庁鑑査官、記念物課、美術工芸課、建造物課の課長及び担当技官の出席を得て本年度の保存科学部・修復技術部の調査研究における特別研究、受託研究、一般研究の報告を行い、昭和51年度における両部の調査研究計画を説明した。更に国際保存センターに関する報告、海外研修生の受入れ、国際交流について報告があった。懇談事項として51年度特別研究、受託研究、文化財保存科学シンポジウム及び研究テーマ選択の方向について意見交換を行った。

## 4 国際交流

### 所長

関野所長(5.23~6.5)は、西ドイツで行われた ICOMOS (国際記念物遺跡会議) 第4回総会及び研究集会へ日本 ICOMOS 国内委員会委員長として出席した。

### 美術部

国際関係としては、美術部の出版物、研究資料など各国との交換が盛んに行われ、また外国の研究者で当研究所の研究員の指導を受け、資料を利用して研究する者も多かった。

川上資料室長(8.25~9.5)と鶴田研究員(8.27~9.5)は、香港中文大学主催明朝遺民書画シンポジウム(海外研修旅行)に出席し、討論に参加した。

野久保技官(7.22~10.7)は、インド・イラン混成文化圏と大乘仏教美術の源流に

関する学術調査（昭和50年度文部省科学研究費補助金海外学術調査研究、代表者高田修氏）に参加し、アフガニスタンのバーミヤン壁画並びに同国及びインド所在博物館所蔵品等の写真撮影に従事した。

岡美術部長（4.18～5.21）は、日本の近代美術に影響を与えた西欧絵画の調査研究及び西欧絵画に影響を与えた海外流出浮世絵の調査研究（海外研修旅行）のため、アメリカ合衆国、フランスに渡航した。

河野研究員（6.16～7.20）は、フリア美術館所蔵の琳派を中心とする桃山江戸時代絵画の調査研究（海外研修旅行）のため、アメリカ合衆国に渡航した。

川上資料室長（5.28～6.6）は、国立故宮博物院所蔵宋代絵画の調査研究（海外研修旅行）のため、台湾に渡航した。

## 芸 能 部

国際関係としては各国大学・図書館・研究機関より、出版物の交換依頼を受け、また外国の研究者の訪問を受けて、これらにわが国の伝統芸能各種目の解説を行うことが多かった。

また横道部長は外国の研究者の指導も行い、柿木音楽舞踊研究室長は、Society for Ethn musicology（アメリカ民族音楽学会）・国際音楽評議会の会員として寄与した。

また国際交流基金の依頼で三隅郷土芸能研究室長（50.3.28～5.6）がブラジル・アルゼンチン・ペルー・パナマの四カ国を訪問し大学、研究機関、博物館等で日本の民俗芸能のレクチャーを各国研究者、学生に行うかわら、現地民俗音楽、民俗芸能に関する資料を蒐集し、各地研究者との意見の交換を行い、多大の研究上の収穫を得た。

また、51年3月、東京でひらかれた国際交流基金主催によるアジア民族音楽のセミナーに参加、アジア各国の音楽学者と意見の交換を行った。

## 保存科学部・修復技術部

### 1 海外出張

(1) 日米文化教育会議（CULCON）博物館交流部会の展示品保存管理に関する専門家会議が、50年8月11日から3日間、アメリカ合衆国ワシントン・フリア美術館で開催

## 事 業

され、修復技術部長西川杏太郎（8.10～8.19）が、前保存科学部長登石健三氏及び文化庁鷹塚技官と共に出席した。なお、この後、外務省の委嘱により、西川部長は鷹塚技官と共に、天皇訪米記念御物展会場の下見と、展示計画についての主催者との細部打合せを行った。

(2)保存科学部生物研究室新井英夫研究員（50.11.28～51.11.27）は、文部省在外研究員（長期）として、ヨーロッパ、アメリカ合衆国に出張、本年度はルーブル美術館附属研究所（パリー）歴史記念物研究所（ジャン・シュール・マルヌ）等で文化財の生物劣化に関して調査研修を行っている。

(3)国際保存センター（ローマ）の研修コースへの参加

3月8日から4カ月にわたってローマで開催される壁画修復コースに、修復技術部第二修復技術研究室増田勝彦研究員（51.3.4～8.1）が、文化庁から派遣され、現地で研修を受けている。

## 2 海外研究者の研究受入れ及び来訪

(1)外務省・国際協力事業団を通じて、韓国国立中央博物館李午憲氏が、昭和50年2月20日来日、出土鉄器の修復処置実技研修を修復技術部が中心となって実施し、一カ年の予定を無事終了して51年2月15日帰国した。

(2)保存科学関係研究者、博物館関係者の保存科学部、修復技術部の施設視察、及び意見交換のための来訪が本年は特に多かった。

フィリピン国立博物館学芸部長 ビラノエバ氏

タイ国皇族 スパドラディス殿下

ソ連エルミタージュ美術館 ロマノビッチ氏及びボリーソブナ女史

チェコ国立博物館修復専門家 アレナ・スカロバ夫人

キューバ国立博物館 ロッサーノ氏

ソ連トレチャコフ美術館 G. S. チュラク女史

ソ連プーシキン美術館 R. D. ショリーノワ女史

ユネスコ本部 ラグナード・グッドムンドソン氏

エジプト国立博物館 モハメド・サラニ氏

フィレンツェ国立修復研究所長 ウンベルト・バルデーニ氏

韓国国立中央博物館前館長 黄寿永氏他3名

韓国国立中央博物館々長 崔淳雨氏

韓国国立中央博物館美術室長 李相洙氏

韓国国立慶州博物館々長 韓炳三氏

韓国国立中央博物館学芸員 姜友邦氏

韓国ソウル市国民大学博物館長 許善道氏

韓国政府文化財管理局 崔光南氏

台湾国立故宫博物院修復技術者 楊源泉氏

### 3 文化財保存修復国際センター議事記録の翻訳，印刷

文化財保存修復研究国際センター（ローマ）の第8回総会及び理事会報告，並びに1973年度より1974年度に至る事業活動報告を翻訳印刷し，日本国内関係機関へ配付した。

## Ⅶ 研究施設・設備

### 1 蔵 書

#### 美 術 部

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書・辞典類など、和漢書（28,076冊）、洋書（3,605冊）計31,681冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録及び拓本などを所蔵し、部内外及び一般研究者の利用に供している。

#### 芸 能 部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,993冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

#### 保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書、調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて1,661冊を所蔵している。

昭和49・50年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美 術 部		芸 能 部		保存科学部 修復技術部		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
昭和49年度	1,049冊	20冊	62冊	—	43冊	6冊	1,180 冊
昭和50年度	372 "	40 "	119 "	—	26 "	10 "	567 "

## 2 資 料

### 美 術 部

当部の最も特色とするところは、美術史研究に不可欠な各種写真資料の整備である。実物よりの直接撮影による普通写真、カラー写真はもとより、赤外線、紫外線、X線、γ線、顕微鏡等特殊撮影による写真を含む写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物をもおさめるという収集の方式は、写真資料の完璧な収集、保管を意図する原則のもとに、設立当初より一貫して力を注いできた。それらは日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ24万点、原板保有量はほぼその3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム250巻がある。写真資料のほか、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

### 芸 能 部

レコード・録音テープ・写真(8ミリ・16ミリシネを含む。)等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。



## 研究施設・設備

区 分	レコード	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 $\frac{mm}{mm}$	16 $\frac{mm}{mm}$	
昭和49年まで 累 計	6,060 枚	1,740 本	168 本	3 本	多 数
昭和50年度	9 枚	157 本	0	0	多 数
計	6,069 枚	1,897 本	168 本	3 本	多 数

## 3 機器・設備

### 美 術 部

#### 機 器

#### 1 X線透過撮影装置

- (1) 可搬式ソフテックス装置 (J型) 1式
- (2) 可搬式ソフテックス装置 (新J型) 1式
- (3) 携帯用ソフテックス装置 (E型) 1式

#### 2 紫外線照射装置

- (1) 可搬式照射装置 (フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) 2台
- (2) 携帯用紫外線検査器 1台

#### 3 顕微鏡装置

- (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 1式
- (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置 (可動支持台及び携帯用スタンド) 1式
- (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 1式

#### 4 マイクロ写真関係設備

- (1) マイクロ写真撮影装置 (付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等) 1式
- (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 1式
- (3) マイクロ閲読機 (ルーモ社製) 3台
- (4) リーダープリンター 1台

5	デアスコープ（視聴覚教育装置）	1台
6	カメラ	
(1)	リンホフカルダン	1台
(2)	リンホフテヒニカ	3台
7	引伸機	
(1)	オメガ（4×5）	2台
(2)	フジ A690	1台
8	複写台 コピースタンド（1300）	1台
9	乾燥機 FCオート（全紙）	1台

## 芸 能 部

### 機 器

1	分析機器	
(1)	ピッチレコーダー	1台
(2)	メログラフ BT型	1式
2	オーディオ関係機器	
(1)	テープレコーダー	15台
(2)	ビデオテープレコーダー	1台
(3)	ステレオ音声調整卓	1台
(4)	スピーカー	4台
3	撮影・映写機器	
(1)	16mm撮影機	1台
(2)	16mm映写機	1台
(3)	8mm撮影機	4台
(4)	8mm映写機	2台
(5)	35mm写真機	5台
(6)	35mmマイクロフィルム解読装置	1台
(7)	16mmシネフィルム分析装置	1台
4	照明器具	
(1)	スタジオ用照明器具	1式

## 研究施設・設備

### 保存科学部・修復技術部

#### 機 器

#### 1 強度・劣化試験機

- |                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| (1) サンシャインウェザーメーター（劣化促進試験機）       | 1 台 |
| (2) 万能試験機（島津，オートグラフ，インストロン型，10トン） | 1 式 |
| (3) 回折格子分光照射器                     | 1 台 |
| (4) 紙耐揉強度試験機                      | 1 台 |

#### 2 顕微鏡装置

- |                        |     |
|------------------------|-----|
| (1) 金属顕微鏡              | 1 台 |
| (2) 生物顕微鏡              | 2 台 |
| (3) 表面アラサ顕微鏡           | 1 台 |
| (4) 万能顕微鏡              | 1 式 |
| (5) 走査型電子顕微鏡（JSM-50A型） | 1 式 |

#### 3 分析装置

- |   |     |
|---|-----|
| (1) ガスクロマトグラフ（ガス分析，水素イオン化検出器・<br>熱伝導検出器・熱分解装置付） | 1 式 |
| (2) 回折格子自記赤外分光光度計                               | 1 台 |
| (3) “ 赤外顕微鏡                                     | 1 台 |
| (4) 自動記録式示差熱天秤                                  | 1 式 |
| (5) 炭素・水素・窒素分析計                                 | 1 式 |
| (6) 光電分光光度計（自記）                                 | 1 台 |
| (7) 螢光X線分析装置（標準型及び非破壊用大型試<br>料台つき）              | 1 式 |
| (8) 可搬式螢光X線分析装置（現場可搬用）                          | 1 式 |
| (9) X線回折装置およびデバイシェラーカメラ，ラウエカメラ（結晶同定）            | 1 式 |

#### 4 非破壊検査装置

- |                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| (1) X線発生装置（60KV P，4 mA）             | 1 式 |
| (2) 工業用X線発生装置（200KV P，8 mA）         | 1 台 |
| (3) Co-60 $\gamma$ 線線源（透視用3c及び0.2c） | 2 個 |
| (4) ガイガー・ミューラー計数装置（放射線測定）           | 1 台 |

(5)	赤外線TVカメラ装置	1式
(6)	超音波探傷装置	一式
(7)	超音波探傷器      UFD-201型	1台
(8)	超音波式コンクリート試験器	1台
(9)	”      厚み測定器	1台
5	物性測定機	
(1)	粒度分布測定装置	1式
(2)	熱膨張計	1台
(3)	レオメーター（粘性試験用）	1台
(4)	直読式動的粘弾性測定器	1台
6	照明及び温湿度装置	
(1)	自動分光放射計（光源の分光測定）	1台
(2)	ライトガイドカラーメーター（色彩測定）	1台
(3)	真空蒸着装置（表面薄膜形成用）	1台
(4)	恒温恒湿槽（0°～40°C    20～90%）	1台
7	殺虫殺菌装置	
(1)	滅菌装置	1台
(2)	減圧殺虫装置	1台
8	菌種保存用装置	
(1)	超低温槽（-50°C）	1台
(2)	冷却遠心機（-5°C～5°C）	1台
9	修復技術処置装置	
(1)	真空凍結乾燥装置	1式
(2)	減圧含浸装置	1式
(3)	エアーブラッシュ装置	1式

#### 4 黒田記念室

記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を陳列している。

收藏されているものは、油絵125点・素描170点・スケッチブック等である。

これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈も含まれており、随時陳列替を行っている。毎週木曜日午後1時から4時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」他である。

#### 5 閲覧室

本研究所美術部資料室の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延1,000名程度である。

## Ⅷ 旧 職 員

### 昭和50年度における転退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課	文 部 事 務 官 長 庶 務 課	幸 文 雄	49. 4. 1～51. 3. 31	茨城大学へ 転 出
	文 部 事 務 官 庶務課長補佐	五十嵐 春 雄	47. 4. 1～50. 4. 15	奈良国立文 化財研究所 へ転出
	文 部 事 務 官 会 計 係 官 長	大 釜 一 也	37. 1. 16～50. 4. 19	東京国立博 物館へ転出
	事 務 補 佐 員	郡 司 靖 子	46. 4. 1～51. 2. 28	退 職
美術部	”	高 橋 久美子	48. 3. 22～50. 4. 30	”
	文 部 技 官 長 美 術 部	岡 畏三郎	20. 5. 15～51. 4. 1	退 職
	文部技官第二研 究室研究員	坂 本 満	33. 10. 1～50. 3. 31	お茶の女子 大学へ転出
	文 部 技 官 資 料 室 研 究 員	永 雄 ミ エ	23. 9. 3～50. 5. 5	死 亡
芸能部	文 部 技 官 長 芸 能 部	横 道 萬里雄	28. 3. 16～51. 3. 31	東京芸術大 学へ転出
	演 劇 研 究 室 事 務 補 佐 員	太 田 有喜子	49. 4. 4～50. 5. 31	退 職
保 存 科学部	文 部 技 官 長 保 存 科 学 部	登 石 健 三	27. 10. 1～50. 4. 1	”

## Ⅸ 関係法規

◎文部省設置法（昭和24年法律 第146号  
最終改正 昭和48年9月29日 103号）（抄）

### 第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条〔審議会〕に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

◎文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日 文部省令第2号）  
最終改正 昭和51年5月10日 第24号）（抄）

### 第5章 文化庁の附属機関

#### 第4節 国立文化財研究所

##### 第1款 東京国立文化財研究所

###### (所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

###### (内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の4部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部

###### (庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

###### (美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。
- 4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行う。



## 関係法規

### （芸能部の3室及び事務）

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 1 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 2 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

### （保存科学部の3室及び事務）

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、及び生物研究室を置く。

- 1 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 2 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

### （修復技術部の2室及び事務）

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室を置く。

- 1 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 2 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果を行う。

### ◎文部省定員細則（昭和44年5月21日文部省訓令第12号）（抄） （最終改正 昭和51年5月10日第9号）

文部省定員規則（昭和44年文部省令第12号）第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

#### 文部省定員細則

- 1 文部省に係る行政機関職員定員令（昭和44年政令第121号）第1条に規定する定

員（以下「定員令第1条定員」という。）及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員の定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令（昭和47年政令第191号）第1条に規定する定員（以下「特措法政令定員」という。）別の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次の表のとおりとする。

#### 文 化 庁

区 分		定員令第1条 定 員	特措法政令 定 員	計
附属 機関	国立文化財 研 究 所	145人 各国立文化財研 究所を通じての 定員とする。		145人

- 2 各国立大学、各国立高等専門学校、各国立大学共同利用機関、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

附 則（昭和51年5月10日文部省訓令第9号）

- 1 この訓令は、公布の日から施行する。

#### ◎国立博物館等の機関別の 定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄） （昭和51年5月10日改正）

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、各国立博物館、各国近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東 京 国 立 文 化 財 研 究 所	47人

附 則

この規定は、昭和51年4月1日から適用する。

## 関係法規

### ◎教育公務員特例法施行令（昭和24年1月12日 政令第6号 最終改正 昭和50年4月17日 第74号）（抄）

（教育公務員以外の者）

（略）

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の3〔国立大学共同利用機関〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

- 一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の3に規定する機関の長及びその職員にあたっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあつては「任命権者」
- 二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕 第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

附則（昭和50年4月17日 政令74号改正）

この政令は、公布の日から施行する。

### ◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号に掲げる職員をもって組織する。

- 一 所 長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課 長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

#### 附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

### ◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程（昭和46年3月15日所長裁定） （昭和47年10月2日改正）

#### （趣 旨）

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度予算額の範囲内において行うものとする。

#### （受託の条件）

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、受託者が一方的に中止することはできないこと。
- (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使  
用させ、または譲与することはできないこと。
- (3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。
- (4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合に

## 関係法規

においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を受託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。

(5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。

- 2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。
- 3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。
- 4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行うことができる。

### (決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

### (受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所契約担当職員に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

### (研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および契約担当職員に通知するものとする。

### (研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の

室および部の長を経て所長に報告するものとする。

- 2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行うものとする。
- 3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行うものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

附 則（昭和47年10月2日改正）

この規定は、昭和47年10月2日から施行する。

〔別紙様式〕

### 受 託 研 究 申 込 書

昭和      年      月      日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名（名称・代表者）

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により、下記のとおり受託研究の申し込みをします。

#### 記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材，器具等の提供
5. その他

黒田子爵記念室観覧規程（昭和12年11月29日制定）

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 1 陳列品に手を触れること。
- 2 インク・墨汁等を使用すること。
- 3 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。ただし、この場合は予め掲示する。

東京国立文化財研究所要覧（昭和50年度）

昭和51年 7 月25日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区 上野公園13-27

電話（823）2241（代）